

第41回全国修学旅行研究大会

報告書

『学びの集大成を図る修学旅行』

— 「これからの修学旅行を考える ～コロナ禍を経て～」 —



2024（令和6）年7月23日（火）

学士会館 2階 210号室

公益財団法人 全国修学旅行研究協会

目 次

主催者挨拶	1
-------	---

岩瀬 正司 公益財団法人 全国修学旅行研究協会 理事長

来賓挨拶	3
------	---

千々岩 良英 氏 文部科学省 初等中等教育局 児童生徒課長

貴田 晋 氏 観光庁 観光産業課 旅行業務適正化指導室長

賛助会員代表挨拶

阿比留 真二 氏 近畿日本ツーリスト株式会社 取締役 事業推進本部長

◎ 全修協報告	9
---------	---

「コロナ禍と修学旅行・その3」

—コロナ禍3年間の振り返りと海外教育旅行の再開—

石原 輝紀 公益財団法人 全国修学旅行研究協会 調査研究部長

◎ 討 論	19
-------	----

「これからの修学旅行を考える —コロナ禍を経て」

○登壇者

増山 孝之 氏 前 栃木県中学校長会 会長（前 宇都宮市立一条中学校 校長）

井上 義一 氏 京都の旅館 金波樓 代表取締役社長

岡田 俊二 公益財団法人 全国修学旅行研究協会 常務理事

関東地区公立中学校修学旅行委員会 事務局長

○進 行

関口 大介 公益財団法人 全国修学旅行研究協会 名古屋事務局長

東海三県中学校修学旅行委員会 事務局長

◎ 総 括	41
-------	----

宮崎 活志 氏 前 文部科学省初等中等教育局 主任視学官

【主催者挨拶】



公益財団法人 全国修学旅行研究協会

理事長 岩瀬 正司

皆様、こんにちは。

今ご紹介いただきました、公益財団法人 全国修学旅行研究協会の理事長 岩瀬正司 でございます。

本日は公私ともご多用の中、また炎暑の中、多数の皆様方に、第41回全国修学旅行研究大会にご参加いただいております。誠にありがとうございます。

さらに、ご来賓の

文部科学省初等中等教育局 児童生徒課長

千々岩 良英（ちぢいわ りょうえい）様

観光庁 観光産業課 旅行業務適正化指導室長

貴田 晋（きだ すすむ）様

そして私ども協会の事業に、ご理解・支援して下さっている賛助会員の皆様方を代表しまして

近畿日本ツーリスト株式会社 取締役 事業推進本部長

阿比留 真二（あびる しんじ）様

には、ご多用にもかかわらず、直接この会場においでいただきお言葉をいただけることに、厚く御礼申し上げます。

本日の第41回全国修学旅行研究大会、この会場には120名を超える方々が、オンラインでも70名以上の方が参加しています。さらに、大会終了後の情報交換会にも60余名の方の申し込みがありました。主催者として、このように盛大な大会が開催できますことは大きな喜びであり、同時に私ども協会の活動を支えてくださっている多くの皆様方に深く感謝申し上げます。

さて、本大会冒頭の「全修協報告」では、昨年に引き続き、このコロナ禍に直撃された全国の公私立中学校・高等学校の修学旅行実施状況を報告いたします。ほぼ3年に渡るコロナ禍が、修学旅行と学校教育、さらに旅行関連事業にどのような影響を与えたのか、きちんと実証・総括しておきたいと思っています。

その報告を受け、「これからの修学旅行を考えるーコロナ禍を経て」と題して、討論を行います。コロナ禍によって、修学旅行の意義が再認識されましたが、多くの、そして深刻な課題も生じています。当たり前の修学旅行が当たり前ではなくなって来ているのです。そこで、実施する学校側、受け入れる立場、さらにその調整役、という三者の代表により、これからの修学旅行を会場の皆様方と共に考えていきたいと思っております。

そして、この討論を受け、専門的立場から前文部科学省初等中等教育局主任視学官の宮崎先生に「総括」をしていただきます。

私は、修学旅行は平和な時代や社会の象徴であると強く確信しています。「戦争を知らない子供たち」という歌がありますが、残念ながら「戦争しか知らない子供たち」が世界中にたくさんいます。

はるかウクライナやパレスチナの地に、そして全世界に、一刻も早く平和が訪れることを祈念して、開会のご挨拶といたします。



【来賓挨拶】



文部科学省 初等中等教育局

児童生徒課長 千々岩 良英 様

本日、第41回全国修学旅行研究大会が開催されるにあたり、御挨拶申し上げます。

本大会の主催者である公益財団法人全国修学旅行研究協会におかれましては、長きにわたって修学旅行に関する調査、研究、情報提供など様々な活動を通じて、有意義な修学旅行の実現に向け取り組んでいただいておりますことに、深く敬意を表します。

また、本日御参加の皆様におかれましても、日頃より、修学旅行の充実に御尽力いただくとともに、文部科学行政へ御理解をいただいておりますことを心から感謝申し上げます。

さて、昨今、修学旅行の実施の在り方、取り巻く環境などが、先のコロナ禍の影響等により顕著に変わってきております。

物価高騰の影響、関係事業者の人手不足、訪問先の混雑などといった、コロナ以前は大きく顕在化していなかった諸問題が生じてきていることは、報道等含めて、取り上げられているところです。

修学旅行の実施に当たっては、各学校の校長先生をはじめとして、先生方の日々の御尽力により、子供たちにとって学びの多い機会となるよう御検討いただいているところでございますが、先に申し上げた諸問題は、修学旅行内容の検討に少なからず影響を及ぼしているものであると思っております。

このような状況において、重要と考えることは、まずは、関係者各位で現在の修学旅行に係る状況・情報を共有すること、そしてその上で、関係者間で連携・協議・相談をしていくことであろうと思っております。

本日、この研究大会において、「コロナ禍と修学旅行」の視点で、ご報告や関係者間の討論が行われることは、まさに時機を得たものであると私も感じており、本日の研究大会が実りあるものとなることを、心から祈念しております。

続きまして、最近のトピックも含めて、何点かお話しさせていただきます。

まず、令和7年4月から10月にかけて開催されます、日本国際博覧会（大阪・関西万博）についてお話しいたします。

大阪・関西万博は、「いのち輝く未来社会デザイン」をテーマとし、日本を代表するプロデューサーや、海外の国・国際機関によるパビリオン展示等の準備が進められているところです。次代を担う子供たちにとっても、学びの多い機会となるものと考えております。

来年度実施する修学旅行につきましては、ちょうど具体の行程が定まってくる時期かと思いますが、行き先の候補の一つとして、引き続き御検討いただければと思います。

このほか、東日本大震災被災地域における、震災の経験を踏まえた体験的な学習プログラムとして、被災地の現状を目で見て現地における復興までの過程を体感することや、語り部から当時の体験を実際に耳で聞くことによる防災・減災学習も大変有意義であると考えております。

また、民族共生象徴空間（ウポポイ）における、アイヌの伝統やアイヌの文化の体験をすることや、アイヌの歴史を正しく理解することも、大変有意義な経験となるものと考えております。

このように、修学旅行の行き先や具体の取組については、教育的意義や多様な地域を学ぶといった観点から、多くの選択肢があろうと考えております。子供たちの学びを充実させるために、引き続きの御検討をいただければ幸いです。

結びになりますが、本研究大会の開催が、修学旅行の一層の充実、発展につながっていくことを期待しております。また、本研究大会の御盛会及び公益財団法人全国修学旅行研究協会の今後益々の御発展と御参会の皆様の一層の御健勝、御活躍を祈念し、御挨拶とさせていただきます。



【来賓挨拶】



観 光 庁 観光産業課
旅行業務適正化指導室長 貴田 晋 様

本日、第41回全国修学旅行研究大会が盛大に開催されますことをお慶び申し上げます。

また、本日の研究大会の開催にご尽力されました全国修学旅行研究協会様をはじめとするご関係の皆様方におかれましては、修学旅行に関する様々な調査研究や情報発信などに積極的に取り組まれていることに加え、日頃より、観光行政の推進にご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、我が国の観光については、新型コロナウイルス感染拡大の危機を乗り越え、インバウンドを中心に力強い回復基調にあるものと受け止めております。

足下の観光の状況を見ますと、訪日外国人旅行者は、直近6月は313万人となり、4ヶ月連続で単月300万人を超え、単月として過去最高となりました。また、訪日外国人旅行消費額も上半期として過去最高となりました。このペースで進めば、2024年は、2025年目標を前倒しし、訪日客数・消費額ともに過去最高を達成できる見通しです。

他方で、観光産業は、需要の回復に地域差が見られるとともに、物価高騰や増大した債務の存在など、コロナ禍がもたらした影響は依然として残されていると認識しております。また、急速な需要回復に伴い、人手不足やオーバーツーリズムへの懸念などの課題も生じているところです。

修学旅行につきましても、昨年5月に感染症分類の見直しがなされたことなどから、コロナ禍前の実施状況におおむね回復してきていると聞いておりますが、こうした新型コロナウイルス感染症の影響による旅行費用の高騰や人手不足は修学旅行の実施を難しくしており、引き続き厳しい状況が続いているものと承知しております。

修学旅行を含む国内教育旅行は、旅行先の歴史や文化などを学ぶ貴重な機会というだけでなく、旅行先での幅広い活動を通じて地域の活性化にも資するものであり、我が国の観光振興を図る観点からも重要

なものと認識しております。

また、日本の将来を担う若者の国際感覚の涵養やダイバーシティへの理解促進、グローバル人材の育成の観点から、海外教育旅行も大変重要であると考えております。

観光庁といたしましては、引き続きご関係の皆様が抱える課題をしっかりと受け止め、文部科学省をはじめ関係省等とも連携しつつ修学旅行を含む教育旅行の回復等に取り組んでまいりたいと思います。

中でも、海外教育旅行については、裾野拡大に向けて、導入に意欲のある学校・地方公共団体と旅行事業者のマッチングや、付加価値の高い海外教育旅行プログラム開発の支援やその普及啓発に取り組んでおります。

さて、本日の研究大会の主題は、「学びの集大成を図る修学旅行」と伺っております。国内及び海外の教育旅行を通じた多様な文化や人々と触れあう経験は、学生が国内外に関心を持つきっかけとなるだけでなく、学校での「学び」との相互作用により、学生にとって素晴らしい財産となると考えております。

こうした学習を通して、日本の将来を担う学生の皆様には、これからの社会が、どんなに変化して予測困難な時代になっても、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現してほしいと思います。

本日の研究大会を通じて議論が深まり、これまで以上に教育旅行が豊かな体験と、より深い学びを提供される機会となることを期待しております。

最後になりましたが、我が国の教育旅行の更なる充実・発展と、本日お集まりの皆様方の益々のご活躍、ご健勝を祈念して、私のご挨拶とさせていただきます。



【賛助会員代表挨拶】



近畿日本ツーリスト株式会社

取締役 事業推進本部長 阿比留 真二 様

ただ今ご紹介いただきました近畿日本ツーリストの阿比留でございます。

本日は「第41回全国修学旅行研究大会」が盛大に開催されますこと、協会をご支援させていただき賛助会員を代表し、心よりお祝い申し上げます。

また、ご参加いただいております全国の教育現場の先生方をはじめ、教育旅行に携わる各自治体や教育行政など、関係諸機関の皆様方には、平素より弊社の教育旅行担当者に対し、多大なるご支援とご協力を賜り、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、弊社教育旅行事業の近況ですが、昨年度より従前の修学旅行を実施することができました。コロナ禍では大きく方面や時期の変更を余儀なくされましたが、本年度の実施ではコロナ前の形態に戻っております。また、国内における校外学習や宿泊研修なども回復してきており、児童や生徒さんの特別活動の中での学びの機会も増加しています。一方、円安や物価高騰の影響もあり、海外修学旅行に関してはコロナ前の70%程度の実施見込みであります。そのような現況の中、修学旅行を実施するにあたり新たな問題、課題が発生していることをこの場にて皆様方と共有させていただければと思います。

はじめに、貸切バス手配におけるドライバー、バスガイドの絶対数の不足と2024年度からの業務間インターバル11時間に起因した、修学旅行ピーク時に貸切バスの手配が困難を極めているという深刻な問題です。特に5月、6月実施分の首都圏・関西、10月、11月、12月実施分の首都圏・関西・沖縄地区が手配困難な状況にあります。早朝、夜間の貸切バス手配が困難を極めております。

また、バス乗務員さんの就職先としての人気低下しており、特にバスガイドさんになりたい方が極めて少ないようで、ほとんどのバス会社が乗務員の高齢化や後継者問題が課題になっています。

このような状況下、関係受け入れ機関の皆様にも最大限ご協力いただきながらも、修学旅行の実施日程が特定日、曜日に集中しているため、課題の解消が進まないのが現状です。特に実施曜日が集中する水・木・金曜日については、行程変更を余儀なくされるなどご無理をお願いしている学校様もあるのが実情です。

課題解消に向けて、是非ともお願いしたいことは「修学旅行専用列車」を利用していただくことです。多くの学校様にご利用いただくことで日程の分散化の一助になると考えます。また、JR特別割引の適用を受けることになり、保護者様の経済的な負担軽減にもつながります。

諸事情により学校様独自の出発日をお決めになる学校様には、火曜日、水曜日を可能な限り避けていただくようにお願いします。現状打開のため、是非ご協力いただけると幸いです。

二つ目は、物価高騰による旅行代金及び旅行内容への影響です。

修学旅行に関しましてはおおよそ2年前にはご契約をいただいております。想定を超える物価高騰に対して私ども旅行各社、精一杯の企業努力に取り組んでいますが、それだけでは対処しきれない状況になっており、旅行の手配内容の変更や積立額の増額を学校様にお願いをする場面が出てきております。まだまだ物価の高騰は続くと思われますので、手配におけるサービス内容を維持していくためにも、物価の高騰を最大限に見据えた積立金額の設定をお願いするとともに繰り返しにはなりますが、JR特別割引の適用を受けることができる修学旅行専用列車のご利用を検討いただければと考えております。

三つ目は、私共も含めた旅行代理店の営業担当者の働き方改革の問題です。

ひと昔前までは、旅行代理店の営業担当者は、ほぼ男性社員でした。修学旅行シーズン中には、連続、深夜までおよぶ添乗業務など男性社員でも厳しい環境下ではございましたが、昨今、旅行会社に入社を希望する社員の多くは女性社員であり、弊社でも教育旅行の営業担当者においては、あと数年で半数以上が女性社員になると予測しております。

女性社員には産休・育休の制度がありますが、今後は産休・育休から復帰した子育て世代の女性社員の働きが不可欠な存在になると考えております。今後、ますます増えていく産休明け社員の教育旅行現場での再活躍の場として、子育て世代の女性社員だけの「インサイドセールスチーム」を立ち上げました。

このチームは、時短勤務や在宅勤務が可能な諸条件を整理し、①営業担当者は学校を訪問しない②企画書提出は郵送かメールで資料を送付③プレゼンテーションは動画を活用④旅行実施に向けた打ち合わせはEメールやZoom等のオンラインMTGを活用⑤時短勤務制度を活用（10時～16時）⑥営業担当者は添乗業務で旅行実施に同行しない。などの仕組み作りを行いました。

東京地区の学校様を中心にモデルケースとしてセールスを展開しましたところ、多くの学校様にご理解をいただき、ご契約をいただきました。ご契約いただいた学校様が弊社に対して、ストレスを感じることなく営業活動を進めて参りたいと考えております。

弊社としては、従来の学校訪問型の営業展開も進めて参りますが、女性社員が長く働ける職場環境を整えながら、今まで以上に質の高いサービスの提供に努めてまいります。

修学旅行実施における課題、リスクは多々ありますが、課題の解消、リスクの低減を常に考え、実行し学びの場である修学旅行を有意義に、そして児童、生徒の皆様の安心安全を第一に考え、質の高い旅行サービスを提供してまいりたいと考えております。今後共、ご支援ご協力よろしくお願いたします。

結びになりますが、本研究大会のご盛会及び公益財団法人全国修学旅行研究協会様の今後益々のご発展を祈念するとともに、ご参会の皆様方の一層のご健勝、ご活躍を祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

【全修協報告】

「コロナ禍と修学旅行・その3」

—コロナ禍3年間の振り返りと海外教育旅行の再開—



公益財団法人 全国修学旅行研究協会

調査研究部長 石原 輝紀

皆様こんにちは。ただ今ご紹介いただきました、全国修学旅行研究協会の石原と申します。本日は大変お忙しい中「第41回全国修学旅行研究大会」にご参加いただき誠にありがとうございます。また、オンラインでご参加の皆様におかれましてもご視聴ありがとうございます。

本日の全修協報告は、一昨年、昨年と本研究大会でご報告させていただきました、「コロナ禍と修学旅行」のまとめといたしまして、コロナ禍3年間の修学旅行を振り返り、このあとの討論に繋げてまいりたいと思います。限られた時間でありますため、少し駆け足での発表となりますことをご容赦ください。よろしく願いいたします。

この「コロナ禍と修学旅行」は、2019年12月以降、全世界に蔓延し世界的大流行となった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が及ぼした修学旅行への影響を3年間にわたり調査し、まとめたものです。本日は、主に公立校を中心にお話させていただきます。

【 2020（令和2）年度 コロナ禍1年目（混乱期） —修学旅行の中止・延期— 】

まず新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、大混乱を招いた令和2年度の修学旅行から振り返ります。修学旅行の中止、延期が相次いだコロナ禍1年目の状況です。

令和2年度は、知識の無い正体不明のウイルスに対し、「リスク回避」を一番に考え、“動かない”、“近寄らない”、“触れない”という選択を執ることとなりました。最終的に多くの学校が「修学旅行中止」という苦渋の決断を強いられました。幸いにも実施出来た学校についても、従来の修学旅行の形を執ることは出来ず、感染予防、感染拡大防止の観点から、移動時間、旅行期間の短縮、移動手段の選定等3密回避の対応をした上での実施となり、極力人との接触を避けるなどの工夫がなされました。

これは、全国の公私立高校・中学校の修学旅行の実施校数と実施率、参加生徒数と参加率を表した表です。令和2年度は、全国公私立合わせて修学旅行実施率は高校が31.3%。中学が56%でした。又、生徒の参加率は高校24.5%、中学50.7%となり、多くの生徒が修学旅行の機会を失いました。

実施率より参加率が低いのは、コロナ禍での参加については各家庭の考え方があり、参加に“同意できない”との事情があったものと推察されます。

これは公立高校の旅行方面別実施状況の構成で、コロナ前の令和元年度との比較です。全体の約7割が「中止」と「次年度への延期」となり、実に2,600校以上の学校で修学旅行を実施することが出来ませんでした。海外への修学旅行はゼロになりました。生徒数にして、およそ426,000人の生徒が修学旅行に行くことができませんでした。

公立中学校も同様です。全体の約4割3,500校385,000人が修学旅行を断念しました。例年、全体の約半数を占め、中学校の修学旅行先の代表とされる京都を中心とした近畿方面への修学旅行は、令和元年度比23.8%まで減少。修学旅行シーズンに閑散とした京都市内という光景が広がりました。

多くは3年次に修学旅行を行う中学校は、修学旅行の経験をせず卒業する生徒たちを出すこととなってしまいました。学校では、そんな生徒たちに、中学校時代の素晴らしい思い出を作ってもらうため様々な「代替行事」を実施しました。工夫をこらしたこれらの行事は、学校生活で仲間と過ごした思い出の一つとなったと思います。

一方で、この混乱の中にあって修学旅行を支える様々な動きがありました。

文部科学省は、再三にわたり、修学旅行のその重要性を発出。学校にとって、修学旅行実施に向けての指標となりました。

観光庁は「GOTOトラベル事業」を起案。修学旅行にも適用となり、感染予防対策のための費用に充当されるなど修学旅行実施の一助となりました。

修学旅行を受入れする自治体及び、その輸送を担う輸送機関も修学旅行が実施できるよう様々な対応をとっていただきました。心より感謝申し上げます。

旅行業界では日本旅行業界（JATA）が中心となり「旅行業における新型コロナウイルス対応ガイドライン」を作成。更に「国内修学旅行の手引き」を作成。この手引の作成には教育界の見識も加えるため、当協会もオブザーバーとして協力させていただきました。

以上が、コロナ禍1年目「混乱期」の令和2年度の修学旅行の状況です。続いて、コロナ禍2年目令和3年度についてです。

【 2021（令和3）年度 コロナ禍2年目（回復期フェーズ1）

—経験値による「ウィズコロナ」での実施—

2年連続の修学旅行中止という事態は避けたいという、学校現場の先生方の強い思いと修学旅行を支える皆様のご協力により実施率は飛躍的に回復にします。経験から学んだ「ウィズコロナ」での修学旅行実施に向けて動き出します。

コロナ禍2年目は、コロナ禍において、如何に修学旅行を実施するかという考え方に転換されました。

家庭、学校をはじめ修学旅行に関わるすべての関係者が連携、情報共有を図り、万全の体制で実施に臨みました。但し、やはりあくまでもコロナ禍での修学旅行実施であり、3密回避は重視され、コロナ前に行われていた旅行方面とは大きく変わりました。

修学旅行の実施率は、高校76.1%、中学校は、85.4%まで回復しました。私立校の回復が、公立に比べ若干低いのは、一つには海外修学旅行を実施していた学校が公立に比べ多いことがあると思います。国内に切り替えて修学旅行を実施した学校もありますが、修学旅行自体は中止として、別に国内で語学研修や異文化理解学習等、代替りの旅行や行事を実施した学校も多数ありました。

これは公立高校の状況です。令和2年度と比較して、中止の学校数は半分以下になっています。2年生で修学旅行を実施するケースが多い高校は、令和3年度も一定数「次年度へ延期」の選択をした学校が見られました。

各方面ともに数値だけを見れば順調に回復しているように見えます。しかし、その中身は違います。コロナ禍2年目、修学旅行の中止回避の方法は、前年の経験を活かした“3密回避”による近場への修学旅行の実施です。

沖縄は、交通手段が航空機のみであり、有事の際の対応の不安から、そして近畿、関東は人の多さという接触リスクの回避から敬遠されました。移動時間の短さ、人との接触回避を重視した旅行方面が選ばれた結果、全体の構成比では従来低かった東北、北陸、東海、四国などが増加した現象がこのグラフの中身になります。

中学校は、高校以上に地元、近隣への修学旅行になっています。北海道は道内、九州は九州7県の学校相互の修学旅行を実施したことで、コロナ前より増える現象が起きました。沖縄県は、他県からの修学旅行は、ほぼ無くなり県内の学校のみのお行き来となりました。コロナ禍という、まさに「禍」を受けた地域と「コロナバブル」という特需を受けた地域がはっきりとしました。

そしてコロナ禍3年目、本格的な回復期となった令和4年度です。海外教育旅行も再開を果たします。

【 2022（令和4）年度 コロナ禍3年目（回復期フェーズ2）

—全面回復へ、海外教育旅行の再開—

コロナ禍3年目は全国殆どの高校、中学校で修学旅行が実施されました。昨年度延期となった学年も修学旅行を行うなど、2（ふた）学年実施した学校も多数あり、多くの県で実施率100%を超えました。コロナ禍の混乱から2年間で全面回復に至るといえる教育現場の先生方のご努力に敬意を表します。

高校の旅行方面別の構成です。令和元年度のバランスに近づいてきています。

近畿方面は、北海道、東北からの修学旅行は戻りきっていませんが、関東、東海地方の他、近隣からの修学旅行も加わり、全体として令和元年度を上回っています。まだ影響が残る沖縄、関東方面がコロナ前までの回復には至っていない分、東北、北陸、東海、中四国、九州の元年度越えの状態は続いています。そして海外修学旅行も一部ですが動き出しました。

中学校も修学旅行実施に関しては全面回復と言って良いと思います。中止はほぼありません。最も多くの割合を占める近畿（京都）も4割強まで戻りました。関東地方の学校を中心に中学校の修学旅行先として京都は根強いものがあります。

以上、コロナ禍3年間の状況をご説明してまいりました。

中止、延期が相次いだ令和2年度。ウィズコロナの環境で「実施する」ということに重きを置いた令和3年度。全面回復に向かい、海外教育旅行の再開も果たし、そしてこれからの修学旅行を考える機会となった令和4年度。

修学旅行に関わる全ての人たちが、それぞれの立場で、これからの修学旅行の在り方について向き合うための3年間であったと考えます。

最後に、2年ぶりに再開した海外教育旅行についてご報告させていただきます。修学旅行の本格実施はまだ少し時間がかかりそうですが、語学研修などの研修旅行を中心に、世界各国に多くの学生が訪れました。現地でこそ学べる「国際理解教育」の再開です。

海外修学旅行は、グローバル化が加速する中、実施に取り組む学校は年々増えていました。途中2009年新型インフルエンザの大流行、2015年パリ同時多発テロなどの影響で実施を見送る年などもありましたが、「国際理解教育」は重要なカリキュラムとして確立され順調な推移を示していました。しかし新型コロナウイルスのパンデミックは、その機会を完全に奪い、過去の事象の比では無いほど大きな影響を与えました。

空白の2年間を経て、コロナ禍3年目の令和4年度は海外教育旅行の新たなスタートの年となりました。

まず修学旅行の実施状況です。

公立高校で9校654人、私立高校は49校4,457人の修学旅行が実施されました。その主な訪問国ですが、オーストラリアを中心としたオセアニアと、アメリカ本土、ハワイ、カナダの北アメリカ方面が先立って再開されました。実施時期は、公立校は10,11月、私立校は2,3月が多く実施されました。

公立校の海外修学旅行の訪問国として、最も多かった台湾は、9月末に観光目的の入国が可能になりましたが、様々な制限（隔離義務、入境者数制限等）が撤廃となったのが年末であり、実施時期の秋に体制が整わず見送られたものと考えられます。

続いて海外研修の実施状況です。公立校126校3,122人、私立校266校8,636人の様々な海外研修が実施されました。

修学旅行とはまた違った「国際理解教育」として、公私立校共に取り組む学校が増えている研修旅行。学習旅行という意味では修学旅行と同様ですが、より目的に特化して行われる研修旅行は、高い学習効果が期待できるものです。訪問国も、修学旅行の訪問国として多い東南アジア、オセアニア、北アメリカに加え、ヨーロッパや中東、アフリカとその研修目的に沿った多様な国々を訪れています。

ホームステイ、語学、国際交流・理解そして、学科の特性を学ぶ研修旅行は、日本の未来を担う若者たちにグローバルな視野を身に付けた国際人としての成長を促す大変意義のあるものです。

再開に向けて進み出した海外教育旅行ですが、少し懸念される部分をお話させていただきます。

この後の「討論」でも触れますが、物価の高騰による旅行費用への影響です。これは、令和4年度とコロナ前令和元年度の海外修学旅行費用（平均額）の比較です。もちろん、実施校の絶対数がまるで違いますので一概に比較にはならないと思いますが、ほとんどの国で旅行費用が大幅に上がっています。海外への輸送手段である航空機の燃油価格の高騰は、旅行費用に大きく影響を及ぼしています。

大幅な旅行費用の上昇は、保護者の過重な負担となることから海外教育旅行再開の時期について検討を要することがあると思います。

以上、コロナ禍で多くの影響を受け様々な経験を積んだ修学旅行ですが、この経験をこれからの修学旅行に活かしていかなければなりません。

令和5年、新型コロナウイルス感染症は、「5類感染症」になり修学旅行は日本全国殆どの学校で実施されました。しかし、コロナ禍が残した様々な影響は今修学旅行実施において解決すべき課題として顕在化してきています。

①先ほども触れました諸物価高騰による旅行経費への影響、②人手不足に起因する様々な問題。バス事業の「2024年問題」も深刻です。③コロナ明けの反動とオーバーツーリズム。旅行者過多による修学旅行円滑実施への支障や居住者の日常生活への影響がクローズアップされています。ただ、情報に惑わされない実態の把握も必要です。④そして、学習指導要領と教員の働き方改革を踏まえた、これからの修学旅行の在り方についての模索など。

この後の「討論」でご登壇いただく皆様にお繋ぎして全修協報告を終了とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。



「第41回全国修学旅行研究大会 全修協報告」

コロナ禍と修学旅行・その3

—新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が与えた修学旅行への影響—
『コロナ禍3年間の振り返りと海外教育旅行の再開』

2024（令和6）年7月23日
公益財団法人 全国修学旅行研究協会
調査研究部長 石原 輝紀

コロナ禍と修学旅行

—新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が与えた修学旅行への影響—
【全国公立高等学校・中学校修学旅行実施状況調査】

2019（令和元）年12月中国・武漢市で確認された原因不明の肺炎は「COVID-19」（新型コロナウイルス感染症）と名付けられ全世界に蔓延。WHO（世界保健機関）は、世界的な大流行を指す言葉で「パンデミック」の宣言をした。

翌年1月には日本国内でも感染者が発表され一気に拡大。4月政府は緊急事態宣言を発出するなど対策を執った。

教育関係でも首相が全国の学校に臨時休校を要請するなど、教育現場に様々な混乱を及ぼした。そしてその中には、都道府県を跨ぐ移動の自粛要請等による修学旅行実施への大きな影響を与えた。

この「コロナ禍と修学旅行」は、そのコロナ禍3年間（令和2年～令和4年）の全国公立高等学校・中学校の修学旅行の実態を調査、まとめたものである。

2020（令和2）年度 コロナ禍1年目（混乱期）

— 修学旅行の中止・延期 —

高等学校、中学校共に、コロナ禍1年目の令和2年度は、知識の無い正体不明のウイルスに対し、「**リスク回避**」を一番考え、「動かない」、「近寄らない」、「触れない」という選択を執ることとなった。「教育的意義や児童生徒の心情等に配慮し、当面の措置として取り止める場合においても、中止ではなく延期扱いとすることを検討するなどの配慮をお願いしたい」という文部科学省の教育活動における修学旅行の重要性についての再三にわたる発信に対し、学校もコロナの収束を待って度重なる延期措置を行ってきたが、最終的に「中止」という苦渋の判断に至り、学校生活の思い出作りとして様々な代替行事」が実施された。

実施出来た高校3割、中学校5割の学校も、従来の修学旅行の形を執ることは出来ず、**移動時間の短縮、旅行期間の短縮、移動手段の選定等、3密回避の対応をした上での実施となり、選出の自粛、日帰り修学旅行、公共交通機関利用の回避等、権力人との接触を避けるなどの工夫がされた。**そしてこの状況は、修学旅行受入地や、輸送機関に深刻な影響を与えた。

実施校数・実施率／参加生徒数・参加率

【高等学校】

区分	対象校数	実施校数	実施率	対象生徒数	参加生徒数	参加率
公立	3,570	1,195	33.5	691,147	196,277	28.4
私立	1,342	340	25.3	341,349	56,542	16.6
合計	4,912	1,535	31.3	1,032,496	252,819	24.5

※対象校数は、文部科学省令和2年度学校基本調査高等学校（全日制・定時制・中等教育学校）による。

※対象生徒数は、全日制部2学年と定時制部3学年及び専攻科、別科、中等教育学校後援課程部2学年の生徒数を表示した。

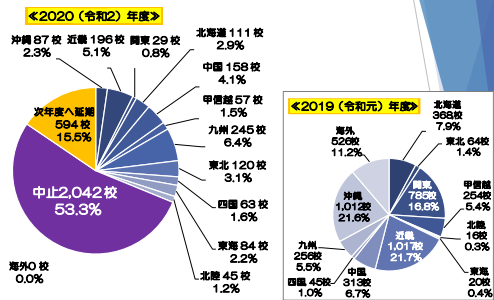
【中学校】

区分	対象校数	実施校数	実施率	対象生徒数	参加生徒数	参加率
公立	9,291	5,435	58.5	964,663	511,698	53.0
私立	782	201	25.7	78,081	17,373	22.2
合計	10,073	5,636	56.0	1,042,744	529,071	50.7

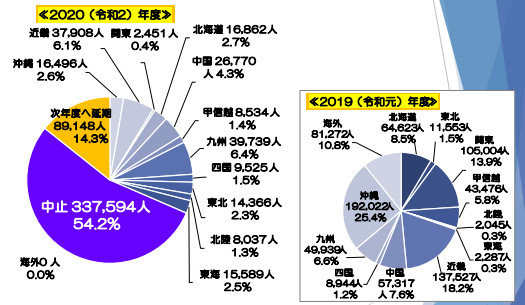
※対象校数は、文部科学省令和2年度学校基本調査中学校による。

※対象生徒数は、第3学年の生徒数を表示した。

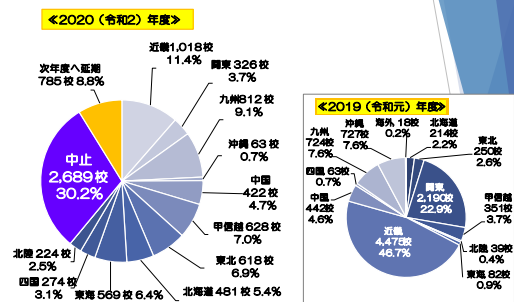
公立高等学校 旅行方面別実施校数構成



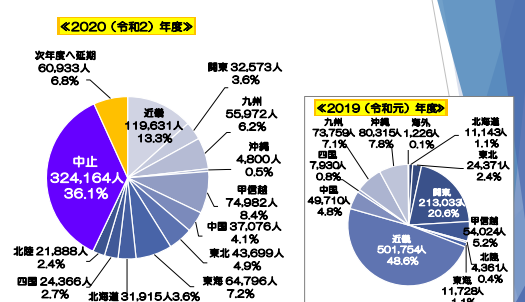
公立高等学校 旅行方面別参加生徒数構成



公立中学校 旅行方面別実施校数構成



公立中学校 旅行方面別参加生徒数構成



混乱期の修学旅行を支えた様々な動き

- 文部科学省発出文書
- 観光庁「GO TOトラベル事業」
- 修学旅行受入自治体と輸送機関
- 日本旅行業協会（JATA）

11

文部科学省発出文書（一部抜粋）

<令和2年3月24日発出>

「令和2年度における小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における教育活動の再開等について（通知）」

文部科学事務次官

3. 入学式及び修学旅行等の学校行事の実施に関すること
（前述略） その他の学校行事についても・・・地域の感染状況等も踏まえ、それぞれの学校行事における学習活動の特徴に応じて感染拡大防止の措置や開催方式の工夫等の措置を講じたり、延期したりする等の対応を行うこと。

特に修学旅行については、その教育的意義や児童生徒の心情等にも配慮いただき、当面の措置として取り止める場合においても、中止ではなく延期扱いとすることを検討いただくなどの配慮をお願いしたい。

12

観光庁「GO TOトラベル事業」

<令和2年7月22日スタート>

ウィズコロナの時代において「社会経済活動」と「感染拡大防止」の両立を図っていくため、「安全で安心な新しい旅のスタイル」を普及・定着させることを目的とする。

国内の修学旅行や研修旅行等に活用可能。宿泊・日帰り旅行代金の割引と、旅行先の土産物店、飲食店、観光施設、交通機関などで幅広く使用できる地域共通クーポンが付与。

感染予防対策のための費用にも充当。（3密回避のための、貸切バス増台費用、宿泊ホテル増室費用補填等）保護者の経済的負担の軽減として、修学旅行実施に向けての一助となった。

13

修学旅行受入自治体と輸送機関（一部抜粋）

◆受入自治体の取組

京都市・・・修学旅行専用電話相談窓口設置

注意喚起ビクトグラム制作

新型コロナ対策緊急支援助成金

新型コロナあんしん遺跡サービス

奈良市・・・24時間対応相談センター設置

修学旅行生支援制度（PCR検査結果待機用個室確保、旅行中の属性修学旅行生の保護者費用支援など）

広島市・・・24時間対応新型コロナウイルス感染症相談窓口設置

広島平和記念資料館見学予約システム（入退制限）

北海道・・・教育旅行支援事業（バス支援、宿泊支援等、感染症対策費用一部助成）

教育旅行専門相談センター、Web相談窓口設置

沖縄県・・・「旅行者の安全・安心アクションプラン」策定。旅行者専用相談センター設置

14

修学旅行受入自治体と輸送機関（一部抜粋）

◆輸送機関の取組

<JR> 「新型コロナウイルス発生に伴う2020年度修学連合体の調整」

2020年度春季に東海道・山陽・九州新幹線の連合体を申し込まれた学校のうち、新型コロナウイルス発生によりゆめを得ず旅行を中止・延期した学校に対する特別措置（取消料免除、連合体料金適用など）

「東海道・山陽新幹線連合体設定除外日の変更」

新型コロナウイルス発生に伴い、中止・延期となった学校が多数あることから、修学旅行再実施に向けて、日程の選定をしやすいするため、連合体設定除外日を一歩変更する。（団体受付除外日の一部撤廃など）

<航空会社> 「新型コロナウイルス影響」に伴う修学旅行団体日程延期の特別対応

新型コロナウイルスの影響により、日程延期の際の運賃を当初予約時の日程と同額を適用。

新型コロナウイルス感染症防止対策の取組のご案内

- (1) 機内空気循環について
- (2) 空港及び乗員の対応について
- (3) 搭乗に関するお願い 等

15

日本旅行業協会（JATA）

「旅行業における新型コロナウイルス対応ガイドライン」作成

新型コロナウイルス感染拡大の予防と社会経済活動の両立を図るため、日本旅行業協会と全国旅行業協会の連名でガイドラインを作成。交通・宿などの各業界のガイドラインと合わせて随時改訂。

「旅行関連業における新型コロナウイルス対応ガイドラインに基づく国内修学旅行の手引き」作成

新型コロナウイルス感染症対策専門家会議において、各業種のガイドライン等の作成に当たって求められる基本的な考え方や留意点が表示され、観光庁や感染症専門医等の指針によって作成されたガイドラインを参考に、公益財団法人全国修学旅行研究協会及び公益財団法人日本修学旅行協会協力のもと作成。現状に合わせて随時改訂。

文部科学省からも、この「手引き」の周知について各都道府県教育委員会に事務連絡が発出された。

16

2021（令和3）年度 コロナ禍2年目（回復期フェーズ1） — 経験値による「ウィズコロナ」での実施 —

高等学校、中学校共に、コロナ禍2年目は前年の経験を活かし、「コロナ禍において如何に修学旅行を実施するか」という考え方に転換された。

日常生活から感染予防対策を徹底し、感染時における対応の準備も怠りなく、家庭、学校、受け入れ施設、輸送機関、旅行会社等修学旅行に関わる全ての人々の協力により修学旅行の実施は飛躍的な回復を見せた。前年、修学旅行中止に伴い行われた「代替行事」（日帰り旅行等）の扱いを修学旅行とした学校が増えたことも実施率回復の一因と推察できる。

但し、コロナ禍での修学旅行実施であることが前提であり、リスク回避の観点においては、前年同様、移動時間の短縮、旅行期間の短縮、移動手段の選定等3密回避は重視され、各都道府県共に、コロナ前に行われていた旅行方面とは大きく変わっている。修学旅行受入地、輸送機関への影響は前年同様続いた。

18

修学旅行実施率の回復

【高等学校】

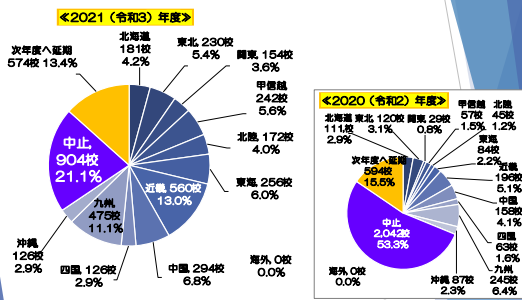
(校、人、%)

区分	年度	対象校数	実施校数	実施率	対象生徒数	参加生徒数	参加率
公立	R 3	3,555	2,817	79.2	666,747	477,114	71.6
	R 2	3,570	1,195	33.5	691,147	196,277	28.4
私立	R 3	1,340	910	67.9	342,302	165,004	48.2
	R 2	1,342	340	25.3	341,349	56,542	16.6
合計	R 3	4,895	3,727	76.1	1,009,049	642,118	63.6
	R 2	4,912	1,535	31.3	1,032,496	252,819	24.5

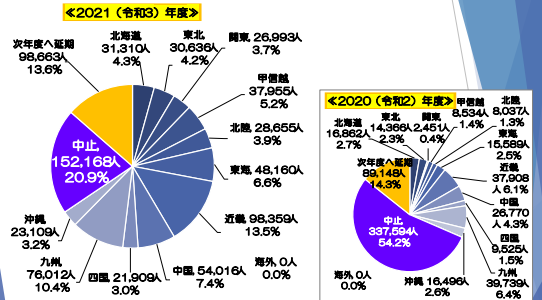
【中学校】

区分	年度	対象校数	実施校数	実施率	対象生徒数	参加生徒数	参加率
公立	R 3	9,230	8,134	88.1	988,676	856,320	86.6
	R 2	9,291	5,435	58.5	964,663	511,698	53.0
私立	R 3	778	410	52.7	80,403	40,723	50.6
	R 2	782	201	25.7	78,081	17,373	22.2
合計	R 3	10,008	8,544	85.4	1,069,079	897,043	83.9
	R 2	10,073	5,636	56.0	1,042,744	529,071	50.7

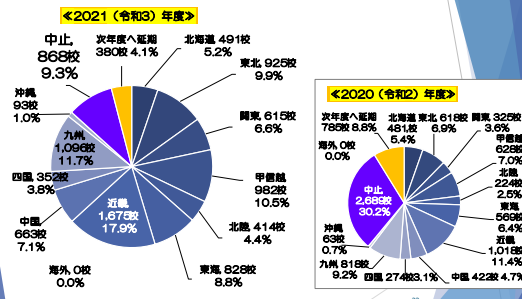
公立高等学校 旅行方面別実施校数構成



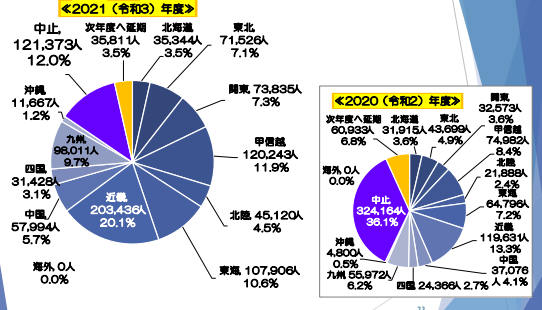
公立高等学校 旅行方面別参加生徒数構成



公立中学校 旅行方面別実施校数構成



公立中学校 旅行方面別参加生徒数構成



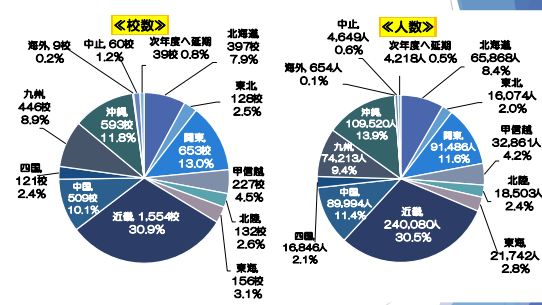
2022（令和4）年度 コロナ禍3年目（回復期フェーズ2） — 全面回復へ、海外教育旅行の再開 —

コロナ禍3年目全国殆どの高等学校、中学校で修学旅行が実施された。前年、前々年中止、延期となった学年も代替の修学旅行を行う等、2学年同時に実施した学校も多数あり、多くの県で実施率100%を超えた。

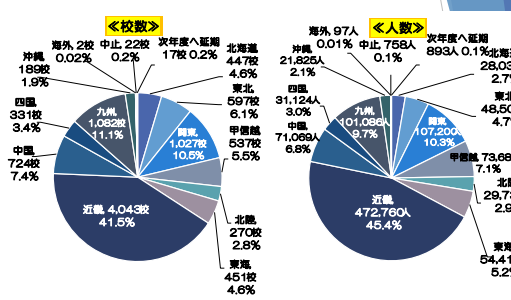
旅行方面については、コロナ前の状態に戻つつある方面と、回復に至っていない方面が混在しているが、この3年間で従来の修学旅行そのものの在り方や意識を改めて見直す機会となったとの声もある。新しい修学旅行への取組みが求められる。

そして2年ぶりに海外教育旅行が再開した。コロナ禍での実施には訪問国毎様々な制約のもとでの実施となり、周到な準備と細心の注意を払って行われたことは言うまでもないが、世界各国に多くの学生が訪れ、その歴史や文化、言語に触れる機会は、現地でこそ学べる「国際理解教育」の再開でもある。

公立高等学校 旅行方面別実施状況構成



公立中学校 旅行方面別実施状況構成



— コロナ禍3年間の修学旅行 —

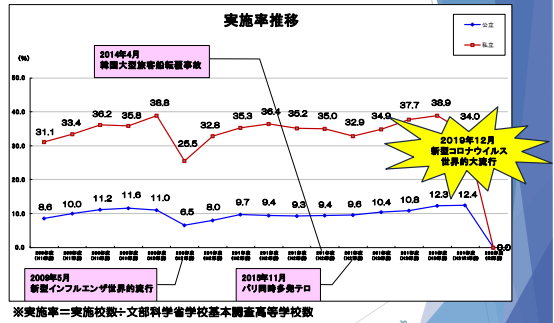
中止、延期が相次いだ__2020（令和2）年度

「実施する」ことに重きを置いた__2021（令和3）年度

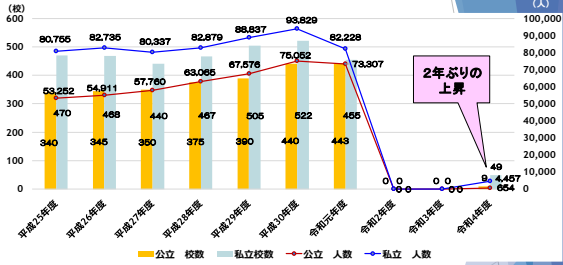
そして全面回復に向かい、これからの修学旅行を考える機会となった
__2022（令和4）年度

海外教育旅行の再開

高等学校海外修学旅行実施率推移



海外修学旅行実施状況推移



高等学校 海外修学旅行「実施数・延べ数」

＜実施数＞

実施数	校数	件数	人数
公立	9	10	654
私立	49	73	4,457
合計	58	83	5,111

＜延べ数＞

実施数	校数	件数	人数
公立	10	10	654
私立	61	74	4,485
合計	71	84	5,139

実施数…1校が1つの修学旅行で複数回訪問した場合でも、1校としてカウントしたものの延べ数…1校が1つの修学旅行で複数回訪問した場合、その訪問ごとにカウントしたものの件数…1校が複数班(科)で異なる方面・日程・費用等で実施した場合に、複数件としてカウントしたものの

訪問国別 修学旅行実施校数・参加生徒数 (※延べ数)

訪問国	公立			私立			合計					
	校数	生徒数	構成比	校数	生徒数	構成比	校数	生徒数	構成比			
台湾	1	1.6	34	0.8	1	1.4	34	0.7				
シンガポール	2	20.0	210	32.1	4	6.6	99	2.2	6	8.5	309	6.0
マレーシア	2	3.3	44	1.0	2	2.8	44	0.9				
インドネシア	2	3.3	69	1.5	2	2.8	69	1.3				
タイ	1	1.6	27	0.6	1	1.4	27	0.5				
フィリピン	1	1.6	28	0.6	1	1.4	28	0.5				
オーストラリア	3	30.0	142	21.7	20	32.8	1,040	23.2	23	32.4	1,182	23.0
ニュージーランド	1	1.6	31	0.7	1	1.4	31	0.6				
ニュージーランド	1	10.0	9	1.4				1.4	9	0.2		
アメリカ本土	1	10.0	40	6.1	10	16.4	1,064	23.7	11	15.5	1,104	21.5
ハワイ	2	20.0	224	34.3	5	8.2	413	9.2	7	9.9	637	12.4
グアム	2	3.3	73	1.6	2	2.8	73	1.4				
カナダ	1	10.0	29	4.4	3	4.9	750	16.7	4	5.6	779	15.2
イギリス	3	4.9	529	11.8	3	4.2	529	10.3				
スペイン	2	3.3	92	2.1	2	2.8	92	1.8				
フランス	1	1.6	28	0.6	1	1.4	28	0.5				
フィランド	1	1.6	44	1.0	1	1.4	44	0.9				
エストニア	1	1.6	44	1.0	1	1.4	44	0.9				
UAE	1	1.6	76	1.7	1	1.4	76	1.5				
合計	10	100.0	654	100.0	61	100.0	4,485	100.0	71	100.0	5,139	100.0

高等学校 海外研修旅行「実施数・延べ数」

＜実施数＞

実施数	校数	件数	人数
公立	126	145	3,122
私立	266	451	8,636
合計	392	596	11,758

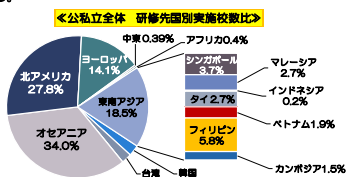
＜延べ数＞

実施数	校数	件数	人数
公立	141	146	3,160
私立	377	455	8,731
合計	518	601	11,891

実施数…1校が1つの研修旅行で複数回訪問した場合でも、1校としてカウントしたものの延べ数…1校が1つの研修旅行で複数回訪問した場合、その訪問ごとにカウントしたものの件数…1校が複数班(科)で異なる方面・日程・費用等で実施した場合に、複数件としてカウントしたものの

高等学校 海外研修旅行

様々な目的をもって実施される「研修旅行」。海外だからこその学ぶ特化された内容により国際人としての人材育成に必要な豊かな経験と知識を習得できる機会として、取り入れる学校は年々増加しており、研修先国も多様である。



オセアニア…オーストラリア、ニュージーランド、パラオ
北アメリカ…アメリカ本土、ハワイ、グアム、カナダ
ヨーロッパ…アイルランド、イギリス、イタリア、オーストラリア、オランダ、スペイン、デンマーク、ドイツ、ハンガリー、フランス、マルタ、スウェーデン、アイスランド
中 東…UAE (アラブ首長国連邦)、カタール
アフリカ…ケニア、南アフリカ

研修先国・研修内容別 実施件数・参加生徒数 (※延べ数)

公立	ホームステイ・留学体験		海外ボランティア		学校指定研修(研修団)		学校指定研修(個人)		スポーツ		文化交流		文化交流・その他		留学・研修旅行		合計				
	校数	人数	校数	人数	校数	人数	校数	人数	校数	人数	校数	人数	校数	人数	校数	人数					
韓国	5	35	3	53	2	21											5	74			
台湾			3	61	3	8	1	2									7	71			
東南アジア	4	54	11	151	3	54	2	17			1	2					21	278			
オセアニア	28	881	14	569	6	104					1	15					49	1569			
北アメリカ	15	462	13	192	12	201	3	88				2	6				45	949			
ヨーロッパ	4	48	6	51	5	106	1	3				3	11				19	219			
合計	51	1445	50	1077	31	494	7	110			7	34					146	3160			
韓国	5	35			3	75			1	20							9	130			
台湾			2	60			1	8									5	90			
東南アジア	40	909	26	395	12	243	4	71			2	22			1	6	84	1626			
オセアニア	93	2242	17	325	16	352											40	350	166	3269	
北アメリカ	72	1404	24	462	5	117	1	14			1	1					22	217	125	2215	
ヨーロッパ	37	926	8	159	9	124	1	19			4	98					3	43	62	1369	
その他	1	10																1	12	2	22
アジア			2	10																2	10
合計	244	5407	79	1411	45	911	7	112	1	20	5	99	4	40	64	612	455	8731			

諸物価の高騰による旅行費用への影響

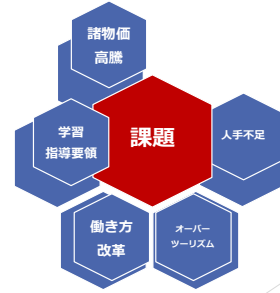
(円)

(主な訪問国)	日数	2022 (令和4) 年度 平均額	2019 (令和元) 年度 平均額
オーストラリア	6.2	295,347	216,201
アメリカ本土	5.7	265,000	251,778
ハワイ	5.7	279,594	230,240
カナダ	8.1	357,601	253,362
シンガポール	5.3	224,573	193,468
グアム	5.0	280,500	169,707

物価の高騰による旅行費用への影響は大きい。宿泊、飲食、輸送等様々なものの値上げを余蘊なくしており、特に海外への輸送手段である航空機の燃料価格の高騰は、燃油サーチャージ（燃油特別付加運賃）の急騰に直結している。まだ一部の実施データであり、実施時期や日数、絶対数の違いから一概には言えないが、コロナ前の同一方面で約1.1倍から1.6倍の旅行費用になっている。

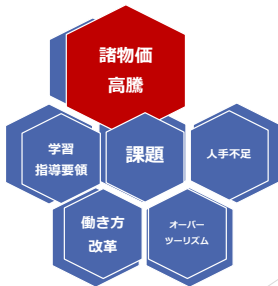
旅行費用の面から海外修学旅行再開時期について検討を要するとの学校の声もある。

これからの修学旅行を考える —コロナ禍を経て



38

これからの修学旅行を考える —コロナ禍を経て



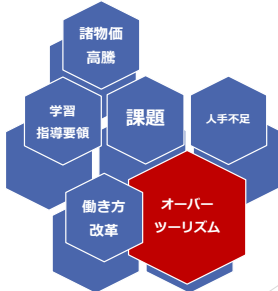
39

これからの修学旅行を考える —コロナ禍を経て



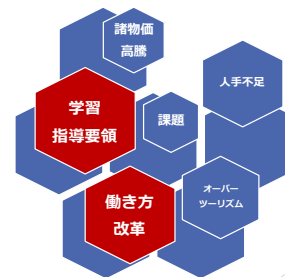
40

これからの修学旅行を考える —コロナ禍を経て



41

これからの修学旅行を考える —コロナ禍を経て



42

【討 論】

「これからの修学旅行を考える

—コロナ禍を経て」



《登壇者紹介》

増山 孝之（ますやま たかゆき）氏

前 栃木県中学校長会会長（前 宇都宮市立一条中学校長）

宇都宮市出身。1986（昭和61）年に文教大学を卒業後、宇都宮市立の小中学校に勤務（社会科）。この間、生徒指導主事を務めた7年間は連続して修学旅行で生徒を引率した。

校長となった令和元年度以降、「修学旅行は中学校における学びの集大成」という関修委の精神を受け、特にコロナ禍の修学旅行実現に苦心し、東北地方、北海道への方面変更を実現した。

2024（令和6）年3月退職。4月から宇都宮市教育委員会で部活動地域移行コーディネーターを務めている。



井上 義一（いのうえ よしかず）氏

株式会社ホテルニュー金波楼 代表取締役社長

京都府京都市出身。

1982（昭和57）年大学卒業後、ホテルサンフラワー札幌入社

1984（昭和59）年 株式会社ホテルニュー金波楼常務として勤務した後、2002（平成14）年代表取締役社長に就任。現在に至る。

2012（平成24）年 近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟
教育旅行部会 全国委員長

2019（令和元）年 KNT-CTパートナーズ会 京都支部 支部長

2021（令和3）年 KNT-CTパートナーズ会 関西連合 会長



岡田 俊二（おかだ しゅんじ）

公益財団法人全国修学旅行研究協会 常務理事 兼 関東地区公立中学校修学旅行委員会（関修委）事務局長

千葉県出身。1984（昭和59）年大学卒業後、近畿日本ツーリスト株式会社入社。個人旅行を担当した後、約16年にわたり教育旅行現場で営業を担当。その後、本社教育旅行担当課長として総括を経験。

2012（平成24）年、全修協に出向し事務局長を拝命。全修協の運営実務はもとより、関修委の連合体輸送実務及び計画策定に従事している。

2023（令和5）年3月、近畿日本ツーリスト株式会社を退職。同年4月より現職。



《進行役 紹介》

関口 大介（せきぐち だいすけ）

公益財団法人全国修学旅行研究協会 名古屋事務局長

大阪府大阪市出身。1978（昭和53）年大学卒業後、名古屋市教員（社会科）。初任校で修学旅行担当の一員として鎌倉で班別分散学習を実施。

修学旅行委員会でのルール作りや行動細案作り等、「生徒がつくる修学旅行」を目指した。中学校の修学旅行については、中学校1,2年生での学びを踏まえ、生徒が成長の姿を発現する場と考える。

2015（平成27）年 愛知県小中学校長会中学校部会長。2016（平成28）年3月退職。2018（平成30）年から現職。



【 関口 】

皆さん、こんにちは。討論の進行役を務めます全国修学旅行研究協会名古屋事務局の関口大介でございます。本日はよろしくお願いいたします。

それでは、初めに登壇者を紹介したいと思います。皆さんから向かって左側、舞台中央から前栃木県中学校長会会長、前宇都宮市立一条中学校校長の増山孝之様です。



続いて、京都の旅館金波楼 代表取締役社長 井上義一様です。

最後に、公益財団法人全国修学旅行研究協会常務理事、関東地区公立中学校修学旅行委員会事務局長の岡田俊二です。

さて、本日の討論ですが、先程の報告にもありましたが、2022年令和4年度から、これからの修学旅行を考える機会になったという報告がありました。このテーマが本日の主なものになります。「これからの修学旅行を考える—コロナ禍を経て」ということでございます。

昨年度、本研究大会は第40回を迎え記念シンポジウムが行われました。その中で再認識した修学旅行の教育的意義、教育文化としての側面、学校単独では実施できない教育活動であるということ、という3つの点を踏まえて、修学旅行の意義、魅力や課題、今後の当協会の在り方に至るまでを各界の代表者に語っていただきました。

コロナ禍による観光旅行業界からの人材流出は、貸切バスの確保や宿泊食事などの関係施設の対応、旅行会社の対応などに大きな影響を及ぼし、その影響は学校現場を直撃しています。加えて、物価の高騰、働き方改革に伴う変化、観光客の極端な集中などの問題もあります。

コロナウイルス感染症の位置づけが5類へと変更になった昨年度、私どもが実施しました修学旅行実施状況調査でも、学校からは実施上の課題として、旅行費用の増大、目的地の混雑ぶり、旅行会社の対応に関するものが多くありました。また、実施上の変化として、一部では目的地をこれまでよりも近くする、また泊数を減らすといった動きも見られています。

こうした現状を踏まえ、私ども協会では、修学旅行が学校単独では実施できない教育活動であることを踏まえ、学校も修学旅行実施に関わる施設等の現状に目を向け、学校として可能な工夫について検討することも必要ではないかと考え、この討論を企画しました。

今回の討論を通して、現状と課題を確認し、課題解決の糸口となる情報の提供が、今後の修学旅行の在り方を考える一助になればと考えております。3名の皆さんには、学校の立場、受け入れの立場、調整役の立場というそれぞれの立場を基本に考えを述べていただきます。なお、今回の討論は、公立中学校の修学旅行を念頭において進めさせていただきます。

それでは、先頭を切って、まず増山先生から発言をいただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

1. 学校の立場

【 増山 】

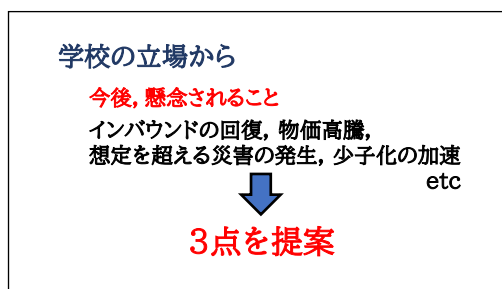
それでは、早速よろしくお願いたします。私は3月まで宇都宮市の中心部にあります公立中学校に勤務しておりました。3月一杯で退職をいたしまして、「少し発言が自由にできる立場だろうから、ぜひ今日は頑張ってくれ」と事務局の方から仰せつかっておりますので、お話をさせていただきたいと思っております。



コロナ禍は、突然の学校休業に始まりまして、学校教育に大きな影響を与えました。修学旅行も然りでございます、その年に予定されていた市内の修学旅行は中止または変更を余儀なくされたところがございます。先ほどの報告にも、かなり多くの学校が中止を余儀なくされて、思い出づくり、学びも制限されたということが出ていた通りでございます。

生徒も保護者も教職員も、その当時修学旅行は諦めておりました。ほぼ無理だろうとみんな諦めていたんです。ですが、そういった中、全国修学旅行研究協会様の修学旅行は中学校における学びの集大成という精神を受けまして、私は校長として2泊3日の修学旅行は何とか実現したいということで工夫をし、コロナ禍の間も修学旅行は全て実施をしてみました。これは私の教員人生の中でも非常に大きな思い出、経験というふうになったわけでございます。これらの経験から、修学旅行は目的をきちんと定めれば、これまでの実績にとらわれることなく、多様な形があるということに気づいた。これはコロナの一つのプラスの影響として残っております。学校生活の制約がほぼなくなった現在ではありますけれども、インバウンドの回復、物価の高騰、想定を超える災害の発生、そしてこれからおそらく、ここにお集まりの皆さんが頭を抱えるであろう少子化の問題など様々な環境の変化が見込まれております。

今後の修学旅行の在り方も変化を求められていると感じているところでございます。本日は、学校が感じている幾つかの懸念の中から、3点問題提起をさせていただきまして、皆様と一緒に考える機会を持ちたいと考えております。



まず1つ目ですが、旅行価格から見た修学旅行の在り方です。実は栃木県は7万円台、高いところでは8万円を超える費用を一回の修学旅行に投入しています。

かなり高いと感じられる方もこの中にはたくさんいらっしゃると思いますが、これは栃木県の各地から東京駅までの交通費が上乗せされるということによって発生するものです。関修委の調査結果なども前に見せていただきましたが、これが妥当な金額なのかどうか。実は栃木県内の中学校では大変に悩んでいるところでございます。京都、奈良方面をほとんどの学校が選択しているという状況がございまして、栃木県内の中学校にとっては、社会状況によって物価上昇がこの後

学校の立場から

- 1 旅行価格からみた修学旅行の在り方
- 2 旅館、ホテル等の宿泊施設やバス、タクシー等交通手段の確保
- 3 災害発生時の情報連携と学校の対応

も続いていけば、契約時と実施時の価格に大きな差が出てしまうのではないかと大変不安に思っているところでございます。

因みに、コロナ禍に、私が勤めていた学校で修学旅行先を函館の方に変更した時があるんですが、その時には北海道が設けておりますコロナ対策の助成金がございます、最初の予算内で何とか2泊3日の修学旅行が実施できたという実績がございます。

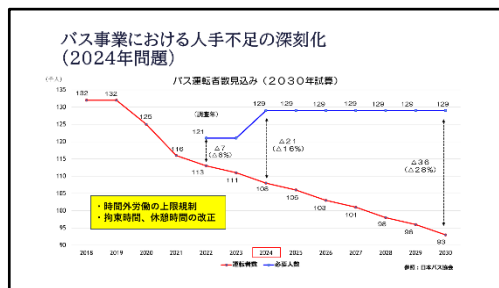
今後、学校によっては各都道府県、また市町村等の取り組みとして補助金のあるような地域を選択するような学校も増えてくるのではないかと考えております。

2つ目ですが、旅館、ホテル等の宿泊施設とか、バスやタクシー等、交通手段の確保が今後十分に行えるのだろうかという懸念があるという点でございます。

旅行者選定のプロポーザルを毎年どこの学校でもやっています。何月何日にプロポーザルをやりますので来てくださいということで大体5社ぐらい指名してお願いするのですが、ここを3か年ぐらいは、大体2社ぐらいが辞退をしています。

当日プロポーザルを行う会社が2社または3社という状況が続いております。以前はそんなことございませんでした。どこも本気で取りに来る。本当に競争がしっかり行われていたわけですが、最近はそのようにならないんです。また、参加した業者さんの提案内容を見ましても、京都市内の宿を提供できない。山城の方とか、滋賀の方とかですね、または「2泊のうち1泊は奈良にどうですか」といった感じのご提案に変わってきています。さらには、バスやタクシーの確保もギリギリの状態でございます、「本番までにバスが十分間に合うかどうか確認がありません」というようなご提案内容をされる業者さんもあります。

さらには、2024年問題などが始まっておりますので、今後の不安材料も大きくなっているところでございます。また、旅行者さん、今日たくさんいらっしゃってちょっと耳が痛いかもしれませんが、旅行者さん自体も、それからご担当者の方も、コロナ以前と比べると、ちょっと弱くなったなというところを学校としては感じています。提案も少し弱くなってきておりますし、何とかインバウンドの方で頑張つて、体力をつけていい提案、それから実行力、また修学旅行を盛り上げていただきたいなと考えているところでございます。



3点目です。これは提案というよりは、むしろ今日お集まりの皆様にご報告したい内容でもあるんですが、昨年度、東海地方の集中豪雨がございまして、宇都宮市内の複数の学校が新幹線車中泊という状況になりました。その中の宇都宮の1校が車中泊の間にコロナが出てしましまして、翌日宇都宮に帰ってきてから3日間学年休業となってしまいました。

この時一番困ったのは、学校として行動判断を行う校長に的確な情報が入らなかったということでございます。やはり学校がどう動くか、子供たちをどう指導するかというのは校長の判断にかかってきますが、そこにJRとか旅行者からの情報が入ってこないんですね。

ですから、校長に先生方や子どもたちが何かを聞いても指示が出せない。それで後手後手になってしまふというようなことがございました。後に、関東地区公立修学旅行委員会を通して、旅行業協会、それから JR には情報連携についてお願いしたいということで、申し入れを強くさせていただいたということが昨年でございました。

実はそのコロナが蔓延した学校は、今年も途中で新幹線が止まっちゃったんです。これは 2 時間遅れぐらいで何とか帰ってこられたので良かったんですが、同じ校長が乗ってありまして、去年の悪夢が蘇ってきたと私に連絡を送ってきました。しかし去年と比べると JR や旅行者からの情報が非常に早く的確だったと申しておりました。あとどのぐらいで解除になりそうなのか、何時ぐらいには宇都宮に着けそうなのかということをお早めに判断できて、保護者の方にもメールで送ることができたということで、昨年と比べると、随分そういう意味では助かったとおっしゃっておいりましたので、この場をお借りして、感謝を申し上げたいと思っております。

これらは修学旅行に関わる者として非常に学ぶことの多い出来事であったわけですが、緊急の際の情報は、判断をする者にとって、つまり校長にとって頼みの綱でございます。今後ともぜひご理解ご協力をお願いしたいと思っております。

以上 3 点学校の立場から、今日の議論の材料ということでご提案をさせていただきます。以上でございます。

【 関口 】

増山先生、ありがとうございます。

なかなか大きな課題ですから、最初にお話ししたように、何か解決の糸口が探れるように、色々な考えや情報が出てくれればいいかなと思っております。

今栃木県の話だったんですが、関東地区の学校の状況というものを含めていこうと思っておりますので、関東全体について関修委の岡田局長いかがですか。

【 岡田 】

関修委の事務局を務めている立場ということでお話し申し上げます。まず、初めて関修委という言葉聞いた方もいらっしゃると思いますので、簡単に説明しますと、正式名称は関東地区公立中学校修学旅行委員会と申します。その略称が関修委です。

関東 5 県、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県この 5 県の公立中学校全校の校長先生方によって組織されている校長会組織であります。今現在、その校数は 1,300 校弱、修学旅行実施学年である 3 学年生徒数は約 18 万 5,000 人程度の規模を持つそういった組織体です。



JR 連合体を考える

関東地区公立中学校修学旅行委員会（関修委）とは

1. 茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県の全公立中学校で構成されている。上記 5 県の校長会に連帯を置く組織体であり、当委員会が運営する JR 連合体輸送の規模は国内最大である。
2. 1983（昭和 58）年に発足以降、連合体輸送（集約輸送）及び修学旅行の調査及び研究を中心に活動しており、「国庫補助金の増額」確保などに参画している。
3. 現在の連合体輸送では、北海道新幹線、東北（秋田・山形）新幹線、上越新幹線、北陸新幹線、東海道新幹線を利用する各コースが設定されている。
4. 委員会発足の当時より旧国鉄をはじめ、関係省庁、関係機関とは密接な関係を維持しており、現在にも JR 6 社等に引き継がれている。

後ほどお話ししますが、主な仕事は JR の連合体輸送があります。連合体輸送とか集約輸送とか、計画輸送とか、色々な言い方がありますが、その実施と運営です。そしてもう一つの仕事はその約 1,300 校の実施状況の調査研究活動、これが大きな仕事です。そういった活動を行うため、5 県で構成されていることを念頭においてください。

今日も関東5県の委員の先生方いらっしゃっていますけれども、年4回、東京都内で会議体を持ちますし、それに加えて各県の修学旅行委員会、埼玉県は修学旅行対策部、栃木県は修学旅行部と、名称は様々ありますけれども、そちらの会議にもお邪魔して状況説明やご意見をお聞きしたりします。

ということで申し上げますと、例えば先ほど全修協報告がありましたけれども、2年前の2022年度、やっとコロナの呪縛が解けて、ほぼ修学旅行が従前の形の実施にこぎつけたこの年については各先生方も「いや～行けてよかった」と、この一言でした。

そして昨年2023年度になりますと、ほぼ円滑な実施。もともとの計画どおりの実施が100%戻ってきた年度であったと思います。さて従前の修学旅行が戻ってきた訳ですが、コロナ禍の残した影響が改めて見えてきました。

先生方からのご意見が多かったのは、やはり「旅費がとにかく高騰して、どうにもならないね」ということ。先ほど増山先生もおっしゃいましたけれども、関修委では6万円から6万5,000円ぐらいが関西2泊3日の主流ですが、栃木県は8万円を超えるところに入ってきています。色々な内容がありますから一概に言えませんけれども、とにかく貸切バス代を含め、旅費が高騰し続けており、これからどうなるか不安だというご意見。

それから、やはり混んでいます。あまり使いたくない言葉ですが、「オーバーツーリズム」と言われる部分で、予定した日程が遅れ遅れになってどうしようもない。本年度ですと京都駅に着いたのは列車発車時刻の2分前。階段を駆け上がってやっと乗れたというような状況も発生したとのことで、とにかく時間が読めない。

そのような状況が多々見られたというところです。とにかく旅費の高騰、混み過ぎている部分、そういったご意見をどこの委員会を回ってもお聞きしました。今後を考える上で、これは懸念せざるを得ない状況がやはり本音となって現場の先生方からご意見として出ているという状況なのでしょうね。

計画輸送で申し上げますと、2年前に計画を作ってまいります。今は丁度2026年度、令和8年度の計画申し込みの最中です。ですから、今年度5月、6月に実施された学校の先生方の印象が非常にものを言います。ということで申し上げますと、2020年から2023年はやってよかった、できてよかったという感覚でしたから、それほど方面的な変更の影響は出なかったと思います。今年は、今まだ申し込みの最終段階を行っているところですが、そういう状況もあってか、関西方面が大半という状況は変わらないんですけども、一部東北、北海道、北陸そういった方面行ってみようかなという学校が少し増えているような感覚を持っています。

それからもう一つ、秋への実施時期の移行の学校が、これもほんの数校ですけども、増えているという感じがしています。もう間もなく申し込みが終わりますので、その辺の詳しいことはあとひと月ぐらいで出ますけども、今、感じている印象としてはそのような状況ということでお話ししておきます。

【 関口 】

ありがとうございました。今、栃木県、そして関東全体の中の傾向ということで話をさせていただきました。

お二人の方からも出ていますし、今回の研究大会のチラシの中にもあります、訪問地が混んでいるという問題、これも少し取り上げておきたいなと思うんですが、関東からは京都が目的地として圧倒的な所になるわけで、昨年のデータでいうと、関東5県の83%の学校が京都で宿泊をしているんですね。連泊すると27万人ぐらいになるという数字になるんですね。ですから、全体でいうと京都で約70万人が宿泊し修学旅行生を受け入れているというような、そういう中にさらに色々な状況があるということです。

東海の方でも小学生が行く地区にもなるし、昨年度なんかはコロナ禍で小学校の時に京都、奈良行けなかったの、中学校で京都、奈良も寄って行こうというような方向性もちょっとありました。

こうした京都の状況について、今回京都在住の井上社長がいらっしゃっていただいているので、地元のお話というか、それと京都市の今、オーバーツーリズム対策と申しますか、そのようなことについても少しお話をいただければと思いますので、よろしくお願いします。

2. 受け入れの立場

【 井上 】



京都から来ました金波楼の井上でございます。どうぞよろしくお願いいたします。オーバーツーリズム、ほんと京都にたくさん修学旅行の生徒さんもお越しいただきまして、我々京都に住んでおりまして、旅館を営業するものには本当にありがたい話だということでもずっとやってまいりましたけれども、最近そういうオーバーツーリズムっていう、どちらかというとアンチ系のお話が一杯出てきています。

今、海外のですね、インバウンドのお客様がかなり増えてまいりまして、この夏ですともう日本のお客さんはどこにいらっしゃるのかなぐらいのレベルで、非常に海外のお客さまが、全世界からと言っても過言じゃないほどたくさんお越しいただいています。

もちろん、4月、5月、6月、9月、10月、11月、12月と修学旅行が動いていらっしゃる時期にも、海外のお客様はどんどん京都にお入りいただいています。今、京都の宿泊事情としまして、コロナ前までは京都市全体で3万室が5万室を目指して、ホテルがどんどん乱立しているところでございました。

その中で、今6万室を超えようという形でどんどんまた建築ラッシュ、ホテルラッシュが始まっております。このような中で修学旅行の生徒様にご迷惑をかけず、学校の皆様にご迷惑をかけないようにオーバーツーリズムが簡単に解決できるのであれば、本当にそれは素晴らしいことなんですけれども、そういう手品みたいなものはないというのが現状でございます。

この今回の討論に参加するということになりまして、京都市や京都市観光協会と色々とお話をさせていただきました。これという特効薬は本当にございませぬ。ただ、私ども京都に住み、京都で宿泊業をやっております、やはり一番感じるのは京都駅と清水寺、あと嵐山方面、ここはとんでもなく混んでいるなということはマスコミにも取り上げられますし、私たちもそう感じております。そのことを京都市観光協

会とお話し申し上げて、今どういうことを京都市と京都市観光協会はやってらっしゃるんだということを少し聞いてまいりました。

今、京都市、京都市観光協会では、時期の分散化を狙っていると。どうしても京都は春、秋という季節が一番いい季節でございますので、そこへどうしても修学旅行も含めて集中していく。それを何とか冬と夏に分散してくれないだろうかということで、色々な取り組みや催しをされております。

それと時間の分散化を今考えています。それは、朝に体験できるお寺をオープン前に開けていただいて、そこへ案内するとか、お寺も含めて夜型の体験学習をして、日中混んでいるのを何とか分散化させていきたいという考え方でございます。

それからですね「歩く京都」。この暑い中 38 度、40 度近い中歩く京都はどうなのかなというのはあるんですけども、やはり乗り物が混んでいてどうしようもないということが一番大きな課題になっておりますので、歩いて京都の町を見学していただくということを、京都市や京都市観光協会は言っております。

それから、ハイキングのようなアウトドアなコースも作っていききたいと。例えば京都市内の北部にあります京北町や高雄。または西の京都というのを売り出していききたいということです。お寺や神社は京都市内中心部にかたまっていますので、それを何とか分散化していききたいという考え方をしています。

「京都 Navi」というコンテンツがございます。この京都 Navi には今京都 10 カ所程度の定点カメラを設置して、バスの状況だとか、その道がどれぐらい混んでいるかという、まさにジャストナウな情報をスマホや、パソコンで見ることができる。これが生徒様の行動にどれだけ活用できるかは分かりませんが、今ライブカメラとして稼働しています。

これは 2 週間先までの大体の混み状況を一応予想を入れながら発表しています。ですから、例えば嵐山は 2 週間後まで大体この時間帯はこんな混み方をしているとか、清水はこの時間帯はこういう状況になるとかを赤やピンクの色をつけて混雑状況を先にお知らせしています。

ただ、これもあくまで予想で、まして 2 週間先ということになりますので、一般のお客様や海外のインバウンドのお客様はそれを見ながら行動されるんでしょうけれども、修学旅行はもっと早い段階で計画されるので、その 2 週間後の予想というのはあまり活用できないかと。ただ、徐々にそういう目に見えるような形で、皆様にお知らせしていくということを、今京都市と京都市観光協会はやっております。10 箇所のライブカメラももっと増やしていききたいという話もあります。ただ、プライバシーの問題とかもありますので、非常にそこは難しいところだとおっしゃっています。

それから「手ぶら観光」を推奨しています。修学旅行はほとんど手ぶらに近いのですが、海外のお客様が大きなバゲージを持って、市バスに乗ったり、地下鉄に乗ったりをすることをなるべくしないで、ストレージのあるターミナルにバゲージを預ける。コインロッカーも含めて京都駅の近くにはかなりの箇所にありますので、バゲージを持って乗らないで欲しいという案内を英語版で表記したりしております。

それから「京都観光特急バス」というのがございます。京都で今 2 つのルートで走っています。1 つは京都駅前から五条坂、祇園、それから岡崎神宮、平安神宮前、銀閣寺の往復。もう 1 つは京都駅から五条

坂、清水寺直行のバスです。このバスは一回 500 円です。他の停留所には一切停まりません。ですから、ある意味観光用のバスです。ただ、お一人様 1,100 円の地下鉄とバス共通の 1 日乗車券というのがあります。これを買えばこの 500 円は要らないんです。1 日乗車券であれば地下鉄も乗れますし、バスも 1 日乗り放題というのが使えます。修学旅行の生徒様はこちらの方が良いのではと思います。

路線バスに観光客のお客様と京都市民が混乗して、そこにバゲージを持った海外のお客様が沢山乗ってこられると、乗車定員オーバーで通過してしまう。特に夕方の清水寺とか嵐山などは。修学旅行の生徒様が一生懸命コース考えて、きっちり守って先生との約束をちゃんと果たしてきたのに、最後清水寺から帰る時間のこのバスが 3 台、4 台と通過して帰舎時間に間に合わなかったというのが現状でございます。ですので、最終の見学地を清水や嵐山といった必ず混むであろうところを外していただくとか、うまくバスと地下鉄で移動されとか、また多少距離があってもそこを歩かれるなど、そういった提案をこれから京都市も観光協会も、そして我々宿泊をお受けさせていただいている施設も旅行会社を通じて学校の皆様にご案内するということがこれからはもっと必要なのではないかと感じております。

一度に解決するという事はもう正直考えられないんですが、何とか皆様のご努力と我々京都で修学旅行の生徒様を大事に何十年も受け入れさせていただいている施設がそういった情報を提供していくとこれをこれからはもっとしていかないといけないと思っています。

「京都って胡坐をかいているよね」と言われる地域ではあるんですけども、決して胡坐をかいている地域ではございませんし、臨 3311 (※) の始まった頃より 70 年、80 年と全国から京都に修学旅行はお越しをいただいています。これを我々は本当に財産としてこれからも続けていくために、尚一層努力をしていかないといけないんだということをつくづく感じております。オーバーツーリズムが少しでも解消されていくように努力をさせていただきますので、どうぞこれからもよろしくお願い申し上げます。

※臨 3311・・・現・近畿日本ツーリストが創業期に始めた修学旅行専用列車「臨時列車 3311 号」の略称

『臨 3311 に乗れ』（集英社文庫 城山三郎著）：日本ツーリスト（現・近畿日本ツーリスト）が戦後、名もなき小企業から上場企業にまで上り詰めていく物語

【 関口 】

井上社長、ありがとうございました。

今のお話の中でも情報というポイントと、それからこの後でも話題になると思うんですけど、分散化、平準化っていうか、いろんな面でのものがあるんですけど、それも一つやはりキーワードになってくるかなと思っています。

京都に限らず、修学旅行の目的地とする所で混むと言われている所は何か所もあると思うんですけど、素朴な疑問で増山先生、京都って混んでいるって分かっている時に、学校としてはどう指導してから行くんでしょうか。

【 増山 】

はい、去年はすごく混んでいましたね。一昨年は落ち着いていて、どこへ行っても空いていたんですけど、去年はもうコロナ以前よりも混んでいたイメージがありますね。特に清水あたりは前の人を追い抜かすことができないほどの混雑ぶりでした。子供たちがお土産を一つ買うのにも列を作って買っているという状況でした。

今、井上社長のお話を聞いていて、なるほどと思ったことがいくつかあったんですが、実は宿泊する旅館、ホテルについて嵐山に泊まりませんかと提案してくる業者さんがあったんですね。

だけど先生方っていうのは三年に一回ぐらいしか修学旅行に行かない。我々校長は毎年行くんですが、三年に一回しか行かない先生方っていうのは、やっぱりあそこの旅館がいい、あそこのおもてなしが良かったというのがあるので、3年後はまたあそことか、今回泊まれなかったあそこに泊めてって、どうしても先生方皆さんおっしゃるんです。ですから嵐山ってなると、その後の動きが京都の町中のお寺、神社に行くのには時間がかかるから嫌だなんて言う先生が多いんです。でも今、井上社長のお話を聞いていて、ちょっと待てよと思いました。嵐山に泊まれば嵐山が混む前に嵐山を歩けるんですね。清水の近くに泊まれば、清水が混む前にみんなで散策できる。そういうことを学校も柔軟に考えた方がいいんだなというのを今聞いていて本当に思ったところがございます。非常に示唆のあるお話でした。

ただですね、時期の変更については、これ学校はなかなかハードルが高くて、春にやっているものを秋に持ってきたら、秋の文化祭と合唱コンクール、体育祭をどうするんだっていう話になりますし、地域のお祭りもございますので、その学校が毎年組んでいるカリキュラムを大きく変更をして学校行事を組むというのは、なかなか校長一人の判断ではできないものです。コロナの時は何とかやりました。その時は他の事もできなかったんで、第一優先で修学旅行をまず移してというふうにやりましたが、元に戻りましたので、年間のカリキュラムの中でどう組むかということ、教務主任さんとか教頭が、知恵を絞って柔軟にやっていくのですが、時期の変更はちょっとハードルが高いということもご理解いただきたいと思います。

【 関口 】

ありがとうございます。

あと、オーバーツーリズム、今、井上社長からもありましたが、色々自分なりに調べてもなかなか解決策はない。ただ、地域での解決策を探りながらというようなことも書いてあったかなと思います。協会内でもいろいろ話し合ったところはあるんですが、京都のこともあったので、オーバーツーリズムについて今取り上げさせていただきました。情報を得るとか、そういったことを活かしながら、少しでも対応していければと思います。学校側としても、子どもたちにどんな指導をしていくかということに関わってくるかと思います。

一旦、オーバーツーリズムについてはここまでとします。今関東の修学旅行の動向につきまして、話を進めてきましたが、全修協は近畿、東海地区の委員会の事務局も務めさせていただいております。この場が少しでも多くの地域のことを土台にした話し合いの場になればいいなと思っていますので、それぞれの地域から来ていただいているフロアの先生方からも発言をいただきたいと思います。

まず最初に、近畿中学校長会の修学旅行専門委員会の委員長でいらっしゃいます大阪市立墨江丘中学校の進藤文代校長先生から近畿地区についてお話をいただければと思います。

【 進藤 】

はい、失礼いたします。私の方からは近畿地区の状況をちょっと説明させていただきます。近畿地区は府県市によってやはりバラバラです。なかなか家庭では遠いところに旅行に連れていけないということもあって、少しぐらい高くても普段行けないようなところに連れて行



きたいという意見もございます。一方、大阪市の場合ですと、市教委より修学旅行の予算の目安が大体指示されます。今年度であれば5万6,000円程度ということで、それをできるだけ超えないように私たちも工夫をしていかななくてはならないということになります。例えばバスを利用して民泊、それから岐阜長野など中部方面、中国四国や九州方面などが大阪市の場合は多いです。

ただ、先ほどもお話が出ていましたように、バスの値段の高騰で、一つ取り組みを減らさなくてはならないというような話が旅行会社から2月、3月に相談があった学校もあります。非常に苦しい状況かなと思います。それと来年は万博がありますので、大阪発のバスが少ないと言われていました。

そうすると、このバス利用が非常に多い大阪市では、これをどうしていくかということで、おそらく集約列車を利用する学校が増えてくるのではないかと思います。まだまだ工夫をしている段階ですけども、現状は以上でございます。

【 関口 】

ありがとうございました。物価の高騰に対する工夫として修学旅行のコースの中の取組みを一部減らすことによって調整しているということもあるということですね。わかりました。

それでは、次に東海地区愛知県の蒲郡市立形原中学校の加藤英雄校長先生、よろしくお願いします。

【 加藤 】

はい、お願いいたします。東海修学旅行委員の愛知県中学校修学旅行委員長をしております愛知県蒲郡市立形原中学校の加藤と申します。愛知の状況としましては、コロナ禍を経て、以前の修学旅行が大分戻ってきました。愛知の場合はほとんどが東京の方に来ているんですけども、班別分散学習等が戻ってくる中で、大きい変化としては、より以前にも増して安全安心を重視して修学旅行を組み立てていくということが重視されるようになりました。



例えば、万が一目的地で発症した場合に、保護者がちゃんと迎えに来られるのか、来られる状況にあるのかどうか、または引き渡しをするにはどうしたらいいのか、現地の医療体制は、救急体制はどうなっているのかという確認。それから分散学習中に地震が起きた時にどうするのかなど、今スマホやタブレットを用いての分散学習を実施する学校が大分増えてきています。

また、アレルギー対応としては、旅行業者を通じて宿泊施設との事前の打ち合わせもそうですが、当日、実際にその料理を確認して本当にこの子のアレルギー対応の料理になっているかどうかの確認をしながら提供をするなどしています。

昨年度6月の線状降水帯による新幹線運休で急遽延泊しなければならないような場合、要するに予定がない夕食、朝食に関して、各学校がそのメニューの分析表を保護者の方にメール等で送って確認を取り、食べさせても大丈夫という確認をとった上で対応するなど保護者の求める安心安全を楽しい思い出ある修学旅行の土台とする対応をしてくれています。

その中で、物価高騰、人手不足（バス運転手、ガイド、旅行業者）をどのように克服するかということ新たな課題になっています。

修学旅行の費用は、およそ 5 万円台から 6 万円台で収まるように何とか今まで頑張ってきています。7 万円台に踏み入れないようにするために努力をしていかなければいけないというところで、旅行業者の方から実施時期の平準化、分散化のご提案をいただいている、日曜や月曜日の出発はできないか、また 5 月下旬から 6 月上～中旬が一番混んでいるので、そこを外すことはできないかというご提案をいただいています。連合体輸送を利用すれば、分散化というか調整はできるんですけども、愛知の場合は新幹線の駅に出る交通の便が非常に不便なところに関しては、やはり連合体は利用できないなど半数ぐらいが利用していない状況にありまして、そういった調整ができないところをどう平準化、分散化をうまくやっていくのかということが大きな課題になっています。

学校現場として、特にこれからの課題に対して、安心安全に関する情報、また保護者負担を軽くする情報、そしてより充実したどんな学びができるのか、どんな出合いを仕掛けられるのか、そういった充実した学びができる情報が欲しいところです。

子どもたちからこのコロナを通じて一番感じたのが、子どもたち自身もしっかり受け止めて、大人たちの動きをしっかりと見つめて、自分達のできることを考えてくれている。最初修学旅行が実施できない、せめて 1 泊 2 日でもという時に、それだったら地元のホテルを使ったらどうだという提案をしてくれた子どもたちであったり、日程が緊急事態宣言で延期になった時にも、延期になればもっとクラスの仲間との繋がりが深くなってから行ける修学旅行になるので、もっと思い出深いものになると言ってくれる子どもであったりとか、6 月の線状降水帯で新幹線が止まってしまった時も、不安を抱える友達を励ましたり、翌日確保された臨時列車の指定席を立っている人たちに譲ってあげる子どもたちだったり、そういった子どもたちのために我々が修学旅行をしっかりと考えていかなければいけないと感じています。以上です。

【 関口 】

ありがとうございました。お二人の先生から現状をお伝えいただきました。どの地域もやはり旅費高騰ということ、バス確保云々ということで課題山積という状況だと思います。

今、安全安心ということも出ました。色々なことで負担感と言っては語弊があるんですが、やはりアレルギーの対応というのは、今大きなウエイトを占めていて、命に関わるということでもありますので、このやりとりの中のことも少し確認をしておかなければと思います。受け入れの立場ということで、少し井上社長から、食物アレルギー対応についてお話いただいてもよろしいでしょうか。

【 井上 】

はい。アレルギー対応は、今京都の施設全体ではございませんけれども、大きく分けて「代替食」と「除去食」と 2 つの方向性で動いております。まだ統計的に取っているわけではないんですけども、その中で比較的除去食が多くなってきたような気がしております。

アレルギーは本当に我々施設側の今一番の問題でありまして、そのために人が何人も取られているという状況で、我々施設の人手不足の中でも、アレルギーに対するウエイトがものすごく大きくなってきています。

昔は、大概、京都の施設は代替食で対応していました。おそらく 10 年前以上だと記憶しているんですが、京都府と京都市と一緒に「食物アレルギー事前調査表」というものを作りました。これは、京都府立大学の先生、給食を用意されている給食関係者、現場の先生方、オブザーバーに旅行会社と我々旅館施設、それから途中休憩とかでも食事を提供されますので、そういう観光系の皆様と話し合って作りました。そ

の頃はまだ「7品目除去」という時代でした。実は今「28品目除去」なんです。そのために栄養士を置いたり、調理師を置いたり、そういう特別なことは今のこの世の中ではちょっと不可能なんです。だから、私どものスタッフの中から担当者を決めて責任を持たせて今やっています。28品目と言いましたけれども、28品目以上あるような気がしてきます。嗜好や好き嫌いと言ってはいけないんですけども、そういうこともあるように感じています。

それとアレルギー対応に関しては今、保護者、学校、旅行会社それと我々施設と、この4つが絡んで動かしています。この4つの中で、アレルギーに関する情報が我々施設に入ってくるのが非常に遅いんです。これは本当に我々にとっては大変なことでもあります。

私どもの例で申しますと、私どもは除去食を中心にやっています。除去食は普通の料理の内容では無理です。それで実は東京にあります「辻安全食品」という日本航空や全日空が機内で出されているアレルギー食のところから買っています。全28品目除去しているものをお出しするようにしているんですけども、これでもまだ「ちょっとこれは食べられない」というという話も一杯あります。

旅行会社から我々に情報が入ってくるのは本当にギリギリです。電話で急かすと、学校からまだ貰えていないとか、今、保護者とやっているからということで、お越しになる2週間前、1週間前という本当に直近というものもあります。それでは対応できないのが現実なんです。

ですから、除去食に変わってきているということです。代替食だとややこしいこともありますし、食品がサプライチェーンの関係上、欠品することがコロナの時はかなり多くありました。急に食材が変わるということもありまして、それに対する食材の成分表を更に出さないといけないとか、非常に手間がかかります。このアレルギー対応というものは本当にどうしたらいいのか常に自問自答しております。

4年か5年前に一度、全修協様と一緒に東京都の校長先生、神奈川県校長先生、関修委の校長先生と会議を持たせていただきました。

先生方のご希望は、やっぱり地産地消のものを食べさせたい。みんなとほぼ同じような料理を出してあげてほしいというものなんです。お出ししてですね、、うちも何十年も旅館をやっていますので、トラブルが無かったと言ったら嘘になります。1年に一回あるとかではないんですけども、やっぱり必ず出てくるんです。想定外のトラブルも出てきます。先生方の思いと保護者様の思いがどうなのかは分からないところではありますが、我々施設が気づかるその料理というのは非常に離れたところにもあるような気もします。許されるのであれば、もう少し早く情報をいただいて、それに対応していきたいというのが我々旅館施設側の考え方です。

まだ京都市の施設の中には一生懸命代替食でやっている旅館もありますし、一方で「除去食以外はできません」とパンフレットにはっきりと明示している施設も出てきています。どっちが良いのかは分かりません。命のことを考えると絶対除去食が良いとは思いますが、やはり修学旅行の食事というのはものすごく施設の思い出として残りますし、なるべく同じ様なものを出してあげたいというのは本音です。ただ、そこはリスクとの問題がありまして、非常に悩ましいところがございます。

これからもアレルギーに関してはもっと複雑になっていくんだろうと感じています。28品目では収まらないことになるのではと思います。それに対して我々にこれ以上求められても、かなり無理があることなのかなという気もします。

我々施設のスタッフの中にも、アレルギー対応に閉口している者はいっぱいおります。私どもの副支配人も「何とかならないんですかね」って言っています。でもやはり修学旅行の大事な生徒様お受けするんですから、受けた以上は一生懸命対応するということが、我々施設がやらないといけないことですし、先輩方が大事に育ててこられた何十年も続く修学旅行を我々はこれから後を継いでいって、また次の時代の若い人たちに繋げていくというのが責任だと思っています。なかなか難しい問題だとは思っています。以上です。

【 関口 】

ありがとうございます。

学校側としても、情報を早く出すということはできることなのかなと思うので、そういったこと一つが変わるだけでもその先を考えた時に、対応に余裕をと考えれば、一つの解決策なのかなと思います。お願いをすることばかりであって、お願いされる側はどうなるかということも考えていくというのが今日のテーマの一つですので、是非そのあたりもお考えいただければありがたいと思っています。

【 増山 】

ご指摘ありがとうございます。学校の方は早く情報を出せるように、各地区の修学旅行委員、各都道府県の校長会を通じて言っていただけるとよろしいかなと思います。

一つ確認させていただいてよろしいでしょうか。今日は旅行者の方もいらっしゃるのですが、このアレルギー対応に関してのいわゆる調査表とか指示書というのがありますが、これは旅行者を間に挟んだ方がいいんですか。旅行者はどう感じていらっしゃるのでしょうか。

例えば、もうどこの旅館に泊まるかってことはもう2年前に決まっているので、場合によっては早めの対応ができると思うんです。学校と旅館が直接やり取りをした方が早くて正確なのであれば、旅行者の手間も省けます。でも旅行者としては、そこはやっぱり自分たちの業務責任の範囲と捉えているんだろうと思うので、学校は旅行者を通じてやり取りをしています。そこをもしかすると簡略化と言うか、正確にやるためにシステムティックにした方がいいのであれば、そこは今後の研究の方法だなと聞いていて思ったのですがいかがでしょうか。

【KNT・松沢】



近畿日本ツーリストの松沢と申します。現状、今先生がお話いただいたように私どもが学校様と旅館様、もしくは保護者様と旅館様の間に立って調査シートを作成してやり取りをさせていただいております。その中で、非常に深刻な重度なアレルギーに関しましては、やはり保護者様と宿泊施設様、もしくは食事提供施設様と直接やり取りをしていただいております。

本音で申し上げますと、私共も直接施設様と保護者様もしくは学校様とやり取りをしていただいたほうが正確なものができるかと思っているんですが、ただ、お引き受けする

施設様、例えば井上社長の所の副支配人様がいつでもその連絡を受けられる状態では多分ないであろうと考えておりますので、一旦、軽微なものも含めて、例えば卵アレルギーですが、それは生ではなくて加熱すれば大丈夫という程度のアレルギー、そういったものも含めてある程度まとめたものを、間に立ってお伝えする役割というのは必要なのかなと今現在捉えております。以上です。

【 増山 】

ありがとうございました。それでは従来通りということで。ただ情報は出せるものは早く出そうということですね。

中学校は入学する時には、全てアレルギーに関する確認をどこの学校もやっております。ただ、アレルギーに関しては1年経ち、2年経ち、3年生になるまでにはアレルギーの品目が増える生徒もいますし、減る生徒もいますし、「これは食べさせないように」と学校に言っているのに、家では食べさせているパターンもあるものですから、なかなか学校も毎日の給食では非常に苦労しているところです。旅館や旅行業者の皆さんも大変だと思いますが、子供たちの安全のためにどうぞ今後ともよろしくお願いいたします。

【 関口 】

ありがとうございました。今3地区の中で物価高騰の問題からくる旅行全体の問題。それから先ほどからずっと出ている色々な確保の問題ですね。その辺をこの後整理して、討論を進めてまいりたいと思っています。一旦、整理するために休憩とさせていただきます。

(休憩)

【 関口 】

今までお話をされてきて色々な課題があるということは十分承知の上での話し合いになっているわけですが、命にかかわるといことで、アレルギー対応について、受け入れ側としてこんな苦労があるということをお伺いしました。その中で先程延泊とか思いもかけないところでまたアレルギー対応ということも出てくるという話もありましたが、そのことで増山先生から発言したいというお話もありましたので増山先生お願いします。

【 増山 】

はい。先ほどの東海地方の校長先生からお話があったんですけど、災害等で延泊とか、それから車中泊になってしまったときの安全安心の確保についてですが、この災害とアレルギーというのは大変重大なことになります。

昨年度、先ほどご紹介した宇都宮の中学校は約300人で修学旅行に行っていました。そこで新幹線車中泊になりました。車中泊になって、次の日の朝までの間になんとか提供できたのは、おにぎり1個とお茶1本です。ですので、アレルギー対応とか何とかそういう問題もありますが、とにかくお腹を、空腹を満たさなければならぬということなんです。

集中豪雨や、地震そういうものが起きると、その沿線に住んでいる方がまずスーパーやコンビニに買い占めに行きますので、いくら旅行会社が支店や本店から人を派遣してもすぐには現地に来られないです。

去年の場合とはとにかく旅行業者が一生懸命対応してくださったけれども、結局途中までしか来られなくて現地には到着できませんでした。それで先生方も含めて、いる人だけで何とか許可をいただいて新幹線から降ろしてもらって、買い物に行った時には、もう何も売っていない状況でした。それでも旅行業者があちこちの支店に声をかけて、集まったのがおにぎり 1 個、飲み物 1 本。これが朝までの食事です。

ですので、さらにそこにアレルギー重度の子供がいた場合にはほとんどないことになりますから、場合によっては食べるものを持って歩かなきゃいけないかもしれないですね。先程のお話を聞いていて、そこまでやらないと、そういう重篤な子についての対応はできないということが去年のその経験をした中学校の校長の話からちょっと思い出しました。これは各学校も考えておかなければならないと言うことを付け加えさせていただきました。

【 関口 】

増山先生、ありがとうございます。

この後のことも含めて少し順番が矛盾するかもしれませんが、ご了承ください。

ここへ至るまでのところで事前の話し合いなどもさせていただいた中で、やはり、その全体でコストに響いてくるという部分に人件費があります。やはり色々なところで働き方改革で人手不足と言われるんですが、ちょっと受け入れ側の方から言うと、こんな部分で人の動きというのは少し変わってくるんだということも少しこの機会にお話を伺っておきたいと思っておりますので、井上社長よろしくお願いします。

【 井上 】

はい。我々京都の施設はもう本当に人手不足で、色々なところに人を頼っているんですが集まらないというのが現実です。今後旅館をやっていく中で、先ほど出ましたようなアレルギー対応とか、人手不足できちとしたサービスが提供できないという状況がそんなに遠い話ではないのではと感じています。私は、経営させていただいて 40 年ぐらいになるんですが、本当に今一番怖いのはそういうことなんです。

京都はお陰様で修学旅行の生徒さんたちが本当にたくさんお越しただいていて、お客様としては沢山需要があるんですけども、供給側が先ほどもちょっとお話ししましたけれども、最大 70 軒ぐらいありました比較的修学旅行、教育旅行に特化した施設が我々の組合で今 46 軒しかありません。46 軒だけが修学旅行を受けさせていただいているわけではなくて、色々なホテル（シティーホテル、ビジネスホテル）が増えています。ただ本当に旅館というのが 46 軒ですから、もう 3 分の 2 ぐらいになっています。

人手の問題というのは本当に一番の喫緊の課題です。

学校の先生方にこんな席に居ながら大変失礼かと存じますけれども、お願いがございます。朝のご出発の時間についてです。非常に早く起床されて朝早く朝食、例えば 6 時 40 分だとか 7 時前に朝食を希望される学校様が結構いらっしゃいます。

昔、新幹線が「こだま」や「ひかり」で動かれていた時代は、京都駅 14 時ぐらいが東京や関東の新幹線の修学旅行列車の出発時間でした。ですが今は「のぞみ」になっていまして所要時間が大分変わってきて、京都に滞在される時間がちょっと長くなってきています。そうなのでも、それこそ 20 年前のしおりがそのまま今年も使用されています。

何故 6 時過ぎに起きて、6 時 45 分ぐらいに朝食して 9 時に出発するのか。確かにご指導等多々あるとは思いますが、6 時半とか 6 時 45 分ぐらいの朝食を提供するには板前は 4 時ぐらいに出てきます。

他の係も5時前に出てきたりしています。それで9時に皆さんがご出発して、9時以降に今度はその日の夜にご到着されます学校様の準備に入るともう1日がそれで終わってしまいます。

そうすると、そのために人は補充しないとイケないんですけども、なかなか募集にかからない。そういうことで、何とか予定といいますか、時程をもう一度再考していただいてご協力いただければ、修学旅行ももっと長く続いて、我々も十分なサービスをしていけるのかなと感じております。以上でございます。

【 関口 】

ありがとうございました。受け入れ側からのお話でした。学校側の方も一度色々と考えていただければと思います。

実は昨年度、日本旅行業協会の方から教育委員会等へ修学旅行に関する要望書というものが出されています。多くの方はご存じだと思いますが、要望書に4つの趣旨が書かれてあって、その一つに「旅行原価の高騰を踏まえた各種検討のお願い」という項目があります。要は、各種費用の高騰を踏まえた旅行方面・内容・代金の見直しや繁忙期を避けた実施時期の検討をお願いしますという要望だったんですね。各所で、この要望は教育委員会に届けられましたので、そこからまた学校にも何か発信されていたと思います。

今、色々価格の問題等からきているのは、バスの確保もそうなんですけど、分散化、平準化というポイントが一つあるということかなど。ただ、増山先生からあったように、学校の年間行事はなかなか簡単には動かせないという中であってこういう問題をどう考えていくのかということがあります。

先程、連合体の話も出ていたかと思うんですが、連合体輸送と関わっている岡田事務局長の方から少し説明をしてもらえればと思います。

3. 調整役の立場

【 岡田 】

はい。その日本旅行業協会からの繁忙期を避けた実施検討をお願いしますという文書を私も読みましたが、「元々、修学旅行って繁忙期で実施してはいいないのだけどな」という思いを持ちました。ゴールデンウィークに行っていないし、盆暮れにも行っていない。もちろん学校行事と関係あるものですから、その時期は無理ということもありますが。

JRで言えば、新幹線の6月は閑散期です。そういう時期も利用して実施しているので、それが繁忙期に当たるのかなという、ちょっと単純な疑問もあるわけです。確かに修学旅行自体の繁忙期はありますよね。連合体を実施している私としては、当然認識しておりますが。

そのような中で、このJR連合体というものを今一度考えていただきたいというのが、私の切なる願いです。関修委についてですが、簡単に概略を申し上げるとこんな感じです。

冒頭にご説明しましたが、1963年(昭和38年)に発足しております。私も関修委利用者の一人でした。昭和50年(1975年)、中学3年の時に東京駅で「修学旅行」と書かれた列車に乗車した生徒の一人でした。感動しましたね。「こんな列車に乗って俺ら行けるんだ」、と嬉しかったことを今でも覚えています。

現在は、東海道新幹線はもとより、北海道、東北、上越、北陸など、全ての新幹線利用のコースが設定されています。委員会発足当時から、元々の国鉄をはじめ関係省庁の皆様方と、密接な関係を維持しております。現在もJR東日本、東海、北海道様と良好な関係を築けております。いつもお世話になっております。ありがとうございます。以上が関修委についてのご説明です。

これはその連合体利用校数の推移です。今年度2024年から10年刻みで過去を遡ったものです。関東5県の中学校は今現在1,300校ほどありますけれども、そのうちの利用校数はこんな状況です。10年ごとに少しずつ減ったり増えたりしております。この学校数は生徒の自然減少による統廃合があったりしたことも反映されております。

J R 連合体を考える

関修委における連合体利用校（人数）の推移 (校/人/%)

年 度	利用校数	設置校数	利用率 (%)	利用人数	生徒数 (5年度標準)	利用率 (%)
1985(昭和60)年度	778	1,235	62.7	202,911	303,511	66.9
1994(平成6)年度	798	1,385	57.6	162,048	258,017	63.0
2004(平成16)年度	776	1,391	55.9	113,876	192,721	60.1
2014(平成26)年度	787	1,362	57.8	115,913	186,976	62.0
2024(令和6)年度	748	1,287	58.1	107,617	170,000	63.3

※各年度の設置校数、生徒数等は国土交通省の学校基本調査結果から引用
※2024(令和6)年度の生徒数については、前年度の調査数値から推定

利用人数は、昭和60年度には総計で約20万2千人。当時5県の対象第3学年は約30万3千人です。利用率66.9%。それが40年経って、令和6年度は約10万7千人の利用。構成率は63%と、それほど大きく変わっていません。このような状況です。

では、連合体を利用するのメリット、デメリットは何か。まずメリットはこの4つです。これは各県の委員会へお邪魔した際にも必ず先生方にご説明をしているのですが、まず1点目は、「安心の確保」。旅行実施の約1年半前の時点で往復のJRが予約されます。

J R 連合体を考える

連合体輸送のメリット

1. 旅行実施の約1年半前の時点で、往復のJR輸送は予約される。【安心の確保】
2. 往復の特急料金が50%割引となる特典が得られる。【経済性の確保】
3. 万一、自然災害、事故等により新幹線の運行に支障を生じた場合でも、連合体輸送の運行列車は、運行再開等の優先となる。【安全の確保】
4. 計画輸送であり、結果的に「旅行の分散化」に繋がる。【集中の緩和】

連合体輸送のデメリット

1. 計画輸送であるので、原則として、旅行出発日、実施日が学校裁量で自由とならない。

よく誤解されるのですが、学校が独自実施でされる場合に、旅行会社に申し込みをすれば、もう列車は予約されていると思い込んでいる先生方が多数おられます。それは違います。旅行実施の約1年前まで正式な回答は出ません。連合体は1年半前に計画が発表されたら、その時点で予約されるというのが一番の安心の確保です。そして往復の特急料金50%割引の特典が得られます。これが「経済性の確保」です。そして、先ほどから出ていますけれども、万一自然災害、事故等で新幹線の運行に支障が出た場合でも、連合体輸送の運行列車は最優先で運行再開に向けた対応をとっていただけます。これが「安全の確保」です。そして計画輸送ですので、結果的に旅行の分散化につながるということでもあります。一列車に乗車出来る人数には制約がありますので、結果的に集中が少しでも緩和されるという、こういったメリットも出てくるということです。

デメリットはたった一つ、計画輸送ですから、原則として旅行の出発日、実施日、そして乗られる列車の時間、これは学校裁量では自由にはなりません。この1点につきます。最終的にどうするか、先生方のご判断に委ねるところでありますけれども、先程来出ている課題も含めて、特に経済的な部分、そして安全の確保の部分、そこを慮っていただいて、極力、連合体のメリットを活かしていただきたいと思っております。

既に60年以上に渡って出来上がっているシステムです。時の人が大変熟慮された素晴らしいシステムだと思っております。そこに旧国鉄、今のJRの皆さんの努力も相まって、現在も維持できているシステム。全国に約30の学生連合体があります。その中の一つの関修委ではありますが、そういった性格を持っておりますので、今一度このメリットをよくお考えをいただいて、活かしていただいて、少しでも安心安全の確保と経済性の確保に役立てていただきたいというのが、実務を担当している私の思いです。

修学旅行は、学校行事の中で唯一学校単独ではできない行事というふうに私共は捉えています。もちろん学校、保護者の皆さん、生徒の皆さん、旅行会社の皆さん、そして井上社長のよう、受け入れていただく各施設の皆さん、こういった方々の総力でもってできるのがこの修学旅行というものです。

様々な方面の方々が関わっていますので異なる考え方もあります。先程の旅費の高騰の問題、オーバーツーリズムの問題などあってですね、なかなか解決することは難しいとは思いますが、ただ関わっている全ての方々の最終的な思いは一つだと思います。修学旅行の教育的な意義を達成すること、そして大切な生徒さんの貴重な体験、これを実現してあげる。これは多分関係者皆さん共通の願いだと思います。今後そこだけを変えてはいけないと私は考えます。

ですから、その根幹、コアを変えないために、必要なことがあったら変えなくちゃいけない、変わらなくちゃいけないこともあるのではないかと考えています。

一つは、先程のアレルギーの問題で、井上社長が少し遠慮してご発言してくれましたが、私は、学校と旅行会社とで進めたものを受け入れ施設に投げて解決できる状況には既にないのかなという感じがしています。あの品目の多さ、生徒さんの敏感な反応の強さ、そして保護者の皆さんの詳細な要望、そういったものを考えると、もうちょっとしたことでは解決できない大変難しい問題にきていると思います。

極端に言えば、除去食での対応の方がよいのではと考えます。確かに修学旅行で地産地消のものを召し上がっていただきたい。もちろんその思いは分かりますけれども、200人いる生徒さんのお一人でもアレルギー発症されて命に関わるようなことになったら、せっかくの修学旅行が全て残念なことになります。それを考えれば、除去食で対応した方がよいのではないのでしょうか。そして、「今まであの旅館さんは対応してくれた。だけどこの旅館はやってくれない。」「あの旅行会社さんは対応してくれた。この旅行会社はやってくれない。」こういう考え方でやっていたら、これからは修学旅行が進まないのではないかなと思います。

様々な部分の不公平さを除いて、全ての場合に同一の対応をしますというものを、もしかしたら国にも上げて、スタンダードを示してもらって決めてしまった方がよいのではないかと。調査の仕方、対応の仕方など、一定の基準を決めてやった方がよいのではないかと気がします。今は特異でも、それが続いていけばいつかスタンダードになります。それが当たり前になるので、そういった方向に進んだ方がよいのではないのでしょうか。

これが、最終的な意義を変えないために、変えなくちゃいけないことは変えると言う考え方です。

【 関口 】

ありがとうございました。では、井上社長の方から最後に一言お願いいたします。

【 井上 】

本当に色々なお話させていただきましたけれども、やはり京都にとって修学旅行の生徒様というのは非常に大切なお客様です。それで、やはり事故のない安心安全な修学旅行を続けていただくように、我々京都の施設も一生懸命努力をさせていただきますけれども、続けていくには学校様のご協力もこれからは必要になってくるのではないかなと考えております。

高い席ではございますけれども、我儘を申しまして申し訳ございません。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

【 関口 】

続いて、増山先生、一言お願ひいたします。

【 増山 】

本日はありがとうございました。冒頭にお話ししましたように、今後、修学旅行に関わる産業界も含めて、少子化というものが非常に大きな影を落としてくると思っております。

でも、小学校も中学校も高校も、修学旅行というのは、物との出会いとか、人との出会いとか、時の共有とか、非常に大きな価値を含んでいる子供たちにとって大きなものでございます。将来に渡っての思い出にもなります。なくてはならない行事だと思っております。

従いまして、子供たちにとって最適な学びの機会を作るために、これまでの慣習に囚われずに柔軟な選択を行っていかねばいけないということを、今日はしみじみと感じたところでございます。国や地方公共団体を含めて、我々大人たちが子供たちの成長のためにどのような環境を整えられるのか、これまで以上に知恵を絞っていかねばならないなというのを実感したところでございます。

関係の皆様、今後とも子供たちのために、ご理解、ご協力をお願いしたいということを申し上げます。私の方から最後にお礼を申し上げたいと思います。本日はありがとうございました。

【 関口 】

ありがとうございました。

私が事務局長という立場で知っている情報の中で、旅行業者がなかなか受注をしてくれないという状況で、特に小規模な学校で困っているというのがあります。今年の動きを見ていると、素早く動いている地区は小さな学校が集まって連合を組んで申し込みをしているというような動きをもう始めています。

昨日もその一校の校長先生とお話をして実態を伺ってきましたが、もう旅行会社から見放されました、受けてもらえる会社がないと。それで自分たちはどういう条件なら受けてもらえるかということで話をし、その条件を満たすように学校間で連合を組むというようなことをやってきたとか、又、中にはもう依頼をすること自体が無理なんじゃないか、周りに旅行会社がないのというようなこと。そうするとどうなるかということ、業者がないということは、安全性の確保もままならない。本当にこの辺も大きな問題ですので、どんな方法があるのか、関係の皆様も考えていただければと思います。

それから、井上社長の方からありましたが、旅行地のホームページでは色々な情報が発信されているということです。先程、増山先生も補助金のことはホームページで知ったとおっしゃられていました。そしてこういった情報はホームページだけではなくて、今ここにお集まりの観光関係の方々セミナーや説明会を開かれたりして、学校が手に入れることができる情報をたくさん発信されている。そういったところから得て、それをもとに旅行会社と話をするというようなことも一つ考えていくことなのではないかと思えます。

もっと皆さんに多くのご意見を伺えればいいんですが、時間のこともあります。アンケート用紙を用意してございますので、そちらに色々のご意見・ご感想を書いていただければと思います。

私共全修協は、修学旅行の3つの柱として、「安全性の確保」、「教育性の充実」、「経済性の適正化」を掲げています。今日の内容は、どちらかいうとその教育性の充実より、条件整備のところが話題になっているんですが、結局そこを解決していかないと、今年のシンポジウムでも「教育的価値から修学旅行を考えたいが、経済的側面から見ると、そうした理想だけではどうにもならない現実がある」と指摘を受けているんですね。公的な補助金など色々なものを含めて、この修学旅行が教育性を担保しながらどのように行われていくか、皆様から様々なお知恵が出ることを期待したいと思います。

この討論の中から課題解決の糸口が少しでも見つければ幸いです。多くの情報を提供してくださいました登壇者の皆さん、またフロアからご発言をいただきましたお二人の先生方にも本当にありがとうございました。皆様に盛大な拍手をお願いいたします。



【総括】

「これからの修学旅行を考える

—コロナ禍を経て—



《総括者 紹介》

宮崎 活志 (みやざき かつし) 氏

前 文部科学省初等中等教育局 主任視学官

東京都出身。1975（昭和 50）年大学卒業後、東京都教員（中学校・国語科）として大田区、武蔵野市の 3 校に勤務。1990（平成 2）年から狛江市教育委員会、東京都教育庁指導部、千代田区教育委員会で指導主事として勤務。2000（平成 12）年、武蔵野市教育委員会指導室長。2003（平成 15）年から東京都教育庁指導部主任指導主事、東京都多摩教育事務所指導課長を務めた後、2006（平成 18）年、文部科学省初等中等教育局視学官。2012（平成 24）年、武蔵野市教育長。2018（平成 30）年から武蔵野大学客員教授。

2022（令和 4）年 4 月から 2024（令和 6）年 3 月まで文部科学省初等中等教育局主任視学官を務める。

中学校教員として、関西方面の修学旅行を多く引率した。また、武蔵野市教育長として市独自の長期宿泊体験学習「セカンドスクール」を推進した。

2024（令和 6）年、春の叙勲で“瑞宝双光章”を受章。



第 41 回 全国修学旅行研究大会

「これからの修学旅行を考える ―コロナ禍を経て―」【総括】

ただいまご紹介をいただきました宮崎でございます。本日は、第 41 回全国修学旅行研究大会がこのように多くの方々のご参加、またオンラインでのご参加もいただき、盛大に開催されましたことをお祝い申し上げたいと思います。誠にありがとうございます。

私は総括ということでお話しさせていただくことになりました。貴重なお時間をいただきましたが、本日伺った報告や大変熱心に語られました討論から学んだこと、気付かされたことなどをお話しさせていただきたいと思います。



1 修学旅行の在り方が問われる ― 全修協報告「コロナ禍と修学旅行・その3」から

さて、まず開会式に引き続きまして「コロナ禍と修学旅行・その3」と題して、全修協の石原調査研究部長からご報告がありました。短い時間でございましたが、大変分かりやすいご報告をいただきました。その報告を聞かせていただいて一番感じるのは、本当に私たちは厳しい環境の時代を過ごし乗り越え、そして今ここに来たのだということ。でも、一つの厳しい時代を通り抜けて、そこに現れた次の世界は元通りの非常に快適な世界であるかといったら、やっぱりちょっと違う。本日は「コロナ禍を経て」という副題がついているわけですが、こう考えますと、やはりその間の色々なことが世界を少し変えていく、そういうきっかけにもなっているのだということが、ご報告で大変よく分かりました。

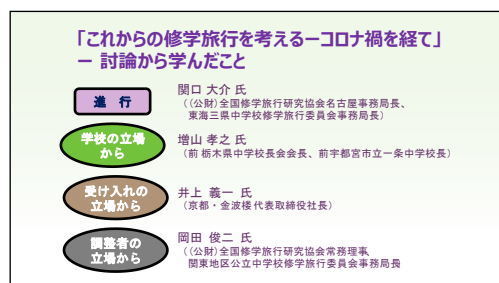
特にご報告の中で、このコロナ禍の期間というのは「修学旅行の在り方を考える3年間になっていたのではないか」とか「経験を活かしていかななくてはならない」という言葉があったかと思います。令和2年、3年、4年、そして、一応法的にも解決を見るような形になった令和5年。コロナ禍から完全に回復したといわれるこの令和6年が現在進行しているわけですが、こうした中で、これからの修学旅行の在り方を考えていくことが求められてきている。このことはここにいらっしゃる皆さん、全ての人達に求められてきているということが言えるのではないかと思います。

そのようなご報告もいただきましたけれども、私のこの総括では、主に討論「これからの修学旅行を考える ―コロナ禍を経て―」を伺って学んだことを述べさせていただき、そのあと修学旅行とは私たちにとってどんな価値を持つものなのかについて改めて考え、これからの修学旅行はどうあって欲しいのか、思うところを述べさせていただきたいと思います。

2 討論「これからの修学旅行を考えるーコロナ禍を経て」から学んだこと

さて、討論でご発言いただきました皆様、とても多くの示唆に富むご発言をいただきました。ありがとうございました。修学旅行は、学校内外の多くの人たちが役割を担っていただき、共に協力して実現する教育活動でございます。協力して働くという「協働」とか、協力して行われる業務「協業」という言葉が支える事業と言ってもよいかもしれません。本日の討論では、修学旅行を支えていただいている三つのお立場からご発言をいただきました。

まずは進行役を務めていただきました全修協名古屋事務局長の関口さんからは「修学旅行は学校単独では実施できない教育活動であることを踏まえ、学校も修学旅行の実施に関わる施設等の現状に目を向け、学校として可能な工夫について検討することが必要だ」という、この討論を設定されたねらいが示されました。まさにその通りで、修学旅行は皆さんの努力があって初めて実現するものです。旅行会社の努力、宿舎の方たちの努力、どれが強いかからといって、どれがあるからといって成立するものではないわけですよ。これらの間に実現する教育的現象なわけです。ですから、そう考えますと、今日お話ししていただいた方々のお立場というのは、そういうものを代表するものです。しかし、それ以外の方たち、例えば輸送にあたっている人たちの問題とか、いろいろまだたくさんあるわけですが、今回は代表的な方々に、お話を伺ったということになります。



まず、学校の立場ということで、前栃木県中学校長会会長で、前宇都宮市立一条中学校校長の増山先生からは、実際にコロナ禍にあった時に、ご自分はその中でもぜひ修学旅行だけは実施したいと思い、修学旅行を行ってきた、その時の思い出なども語っていただきました。そして、三つの点についてお示しいただいたわけでございます。それは一つが、まず、これからの課題として、旅行価格から見た修学旅行の在り方ですね。価格的なもの、これが一つありました。それから、二つ目には、宿泊施設や交通手段の確保の問題が大変大きな課題になっているということです。それから、三つ目は、災害発生時などの情報連携と学校の対応といったことについて、特に、昨年度経験した車中泊の際の危機管理についての思い出なども話していただきました。これは、これから考えていかなければならない修学旅行の一つの大きな問題を示していただいたわけでございます。

実は、私も台風の影響だったと思いますが、車中泊せざるを得なくなった経験がございます。教育委員会の指導主事をしている時に、ある学校に付き添う形で修学旅行に同行した際、列車が一晩中、朝までずっと途中の駅で止まってしまい、私も夜中じゅう車内を歩き回って、子どもたちの体調などを見て回ったことを思い出しました。そして増山先生からお話しいただきましたが、おにぎり一つ用意するのがやっとだったということでしたが、私の時は何もなかったですね。無理だったのです。ちょうど日曜日で、お店といってもどこもやっていないのです。買うこともできない。したがって、翌朝までの水分の補給だけを何とかするということでした。そして、到着駅までバスで迎えに来ていただき学校まで送り届けたとそんな記憶がありました。その時はもう本当に手探りで、全てその場で考えて決定していくわけですので、その不安たるや大変なものです。

やはり緊急連絡の体制につきましては、旅行会社の方たちの人手不足にも一つ起因しているところかと思いますが、システムそのものもある程度合理化していく中で、漏れることがないようにしていただくことは大変重要ではないかという気がいたします。

そして、増山先生からは、宿泊地をどうするかを学校でも考える必要があるというお話がありました。これは次にお話しいただいた、井上社長からのお話にもありましたけども、(翌日の訪問先の)嵐山泊ということはあり得るわけですね。ですから、どうしても前例にそって、なるべく先輩たち、先に経験した兄弟姉妹と同じ体験をさせてあげたいという気持ちを学校の先生方は持っていますし、その気持ちは分かるのですけれども、こうなってくると、やはり合理的な実施方法を考えていく、合理的に解決できる方法を考えていくということが必要なのかもしれない。

多くの子供たちを受け入れていただいている京都でございますが、特に海外観光客の激増であるとか、ホテルの建設ラッシュといったような新しい問題に対して、京都市では中長期的に対応されているということ。「これらは特効薬ではないが」と井上社長がおっしゃっていましたが、京都市としてできることを一生懸命考えてやっけていただいていると思い、大変頼もしいなあ、ありがたいなという気がいたしました。

ただ、やはり(アレルギー対応の)食事の問題は、井上社長もおっしゃっていましたが、宿舎にとっては大きな問題になっていて、そこに人手不足の問題も加わり、今では、サプライチェーンの変化などもあり、そういう中で大変難しい問題になっているということも事実だと思います。

今日は皆さんもお話を聞いていただいて、「代替食」「除去食」といった言葉で、その具体的な解決策を心の中で色々考えたのではないかなと思うのです。内なる言語である内言が働いて「そうか、そういう方法も仕方がないか」とか「いや、でも可能な限り他の方法もあるんじゃないか」などとお考えになったかもしれません。これは後ほど申し上げますが、知恵を出し合うということはやはり大事だなという気がいたします。しかし 28 品目に拡大したアレルギー食材というのは、ほとんどこれもダメ、あれもダメと、そのご苦労にはもう本当に頭が下がる思いでございます。

井上社長は、人手不足ということが、サービスを提供する機能といったものに影響するということがあってはならないとお考えになっているということですが、ただ、お話にあった「早朝行動(=宿舎職員の早朝対応)」など、学校がずっと伝統的に持っている行動スケジュールの改善のご提案は検討に値するのではないかなと思います。例えば、宿泊地と見学先との問題などを考えると、そんなに(早朝から)急がなくても、もう嵐山に来ている、そこで目覚めたのだ(早い時間帯から行動しなくてもよい)ということは、あり得るのではないかなという気がいたします。

そして、最後に、調整者の立場ということで、こちらは全修協常務理事の岡田さんからお話をいただきました。コロナ禍からの回復、そして混雑、ひょっとしたらコロナ禍以前よりも混雑の度合いが進んだような事態になっている。そして旅費の高騰。今後の懸念すべき状況が、今、コロナ禍を抜けて見えてきたというところでお話が始まりました。

特に最後に、分散化の問題について、今現在可能な努力がなされているということがよく伝わってまいりました。JRの連合体輸送では、昭和38年からこれに伴って各地での委員会も設置されたと思います。「学校の希望が生かされない」とこれはよく校長先生からも言われることですが、しかし、経済性も含め最善、次善の策として非常にしっかりしたものがこれまで構築されてきた。これについて果たしてこれが

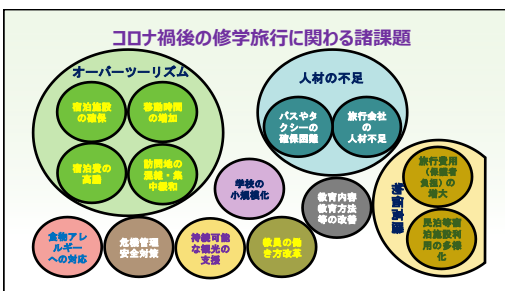
らどのような修正が行われるかといったこと、こういったことがまたちょっと難しいのかなという気もいたしました。でも、引き続き取り組んでいくべきことだと思います。

またフロアからも、近畿の進藤先生からバス代の高騰や万博に伴うバス不足の問題であるとか、それから東海に加藤先生からは安全安心の重視やスマホ・タブレットを利用しての分散学習などを考えているなど色々工夫されているとのお話が出ました。それから最後に「子供たちが自ら考える修学旅行」ということが出ましたが、実は私もこれは大きな一つのヒントだと思っておりまして、こういう現状にあるということに子供たちをただのお客様にしておくのではなくて、一緒に考えて、こういう状況でどのようにしたらよい修学旅行を作れるかということに、計画の段階から子供たちに参加してもらい、そこに自己責任を持っていただくということも大事なのではないかなという気がいたしますね。そんなことも考えさせられた討論でございました。今後、様々な修学旅行の在り方が検討できる、そういう素晴らしい討論であったということで、本当にお礼を申し上げたいと思っています。

私がこの討論全体を通じて感じたことは、コロナ禍後に噴出していると言ってもよい様々予測される課題であるとか、心配であるとか、不安というようなこと、これらに目を背けてはいけない。今思い当たる、考えられる様々な不安とか、こういう時はどうしようかということに目を背けず、それらを避けることなく、何か対応ができるのではないかと、皆さんで協力して考えていくことが、やはり大事なのではないかなと思うのです。

最初に進行の関口さんがおっしゃっていたように、修学旅行は学校だけではできないものなのです。だから、その課題の解決も学校だけでは無理だし、委員会だけでも無理ですし、旅館宿舎の方々だけが何かやってもそれだけで全体が変化できるものでもないところもあります。やはりそういう課題から目を背けずに、これから皆で努力していくことが我々に課せられていることだなという気がいたしました。

3 コロナ禍後の修学旅行に関わる諸課題



さて、後半では、コロナ禍後の修学旅行に関わる諸課題として、今回の報告や討論で取り上げられたコロナ過後の修学旅行に関わる諸課題の主なものを、簡単にもう一度振り返ってみたいと思います。

まず「オーバーツーリズム」ですね。訪日外国人観光客の増加でございます。上半期はなんと1,777万7,200人。大変な数の外国からのお客様がみえました。ここでは「宿泊施設の確保」の課題や混雑による「移動時間の増加」、それから今日話題にもなりました「宿泊費の高騰」、これは「オーバーツーリズム」とも関係がございます。「訪問地の混雑」や実施時期なども含めて、「集中をどう緩和するのか」という課題につながっていくかと思います。

次に、「人材の不足」でございます。運転手さんたちの不足ということは、「バスやタクシーの確保困難」という切実なものになってきております。また、先ほど、近畿日本ツーリストの阿比留さんのご挨拶の中にもありましたが、「旅行会社の人材不足」は、コロナ禍がもたらした大変大きな現実的な影響の一つだと言えるのではないかと思います。コロナによって我々が色々なことを我慢しなければならなかった時、

最初に我慢させられたのが移動ですよ。旅行といったものが一切なくなってしまう。この期間を旅行会社の方たちは、よく耐えたのだなど。これは大きな影響の一つだと思います。

そして、「物価高騰」でございます。コロナ禍後、ロシアのウクライナ侵攻も加わって、世界的なエネルギー価格や原材料価格の上昇、それから円安による輸入品の価格上昇などで、物価高騰が暮らしを直撃しております。旅行費用の増大、当然これは保護者負担の増加ということになります。そしてこの費用の問題というのは、学校教育の中で行われる修学旅行にとって大変大きな課題になります。また、そのことに付随して地域によっては民泊等宿泊施設利用の多様化などが検討されるということもあるようでございます。これは宿泊施設だけではなくて、先程の宿泊地をどこにするかという問題、それから訪問先を以前とは変えていくといったような問題もあるかもしれません。

その他、修学旅行にかかわる課題として、学校教育の現状に起因するものもでございます。例えば、少子化に伴う「学校の小規模化」は着実に進んでいます。討論の際にスライドに表示されていた何年か前の実施校数と生徒数などを見ると、すごく多かったのだなということを感じました。現在、全国の集計をとると、学年別児童数が100万人を超えているのは小学校4年生までです。4年生ということは、5年後の修学旅行生までは100万人を何とか超えているのですが、それ以降は100万人を切っていくのです。現在生まれている子供はもっと少ないです。

また令和5年の中学3年生の1校あたりの人数ですが、これは分校を除く本校の数を中3の人数で割った場合ですね。1校あたりの人数は約108人です。もう平均するとそこまで旅行の規模が小さくなっているということですよ。そうしますと、先ほども討論の中で出ていました、受注の問題なども出てまいりますね。果たしてこの規模で受注してくれる旅行会社があるのだろうか。これでは引き合いませんということも出てくるのかもしれない。

また、教育内容や教育方法等の改善という問題も現在は大変大きな問題になってきているところです。教員の働き方改革、本日はあまり話題になりませんでした。やはり修学旅行を引率していくということには大変大きな教員側の働き方の問題というものが絡んでまいります。これは果たして合理的に解決できるのかどうかということがあります。

それから、一番大きな話題とも言えるかもしれませんが、食物アレルギーへの対応とか、集中豪雨などに伴う、例えば交通機関の停止による危機管理をどうするか、その時の安全対策、その時のアレルギー対応をどうするのかといった安全対策なども大変大きな課題になると思われまます。

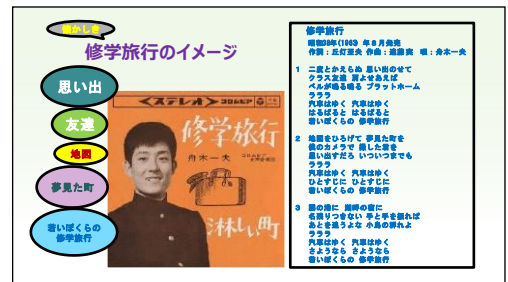
そしてもう一つは、これは本日ここで出されたわけではないのですが、修学旅行というものが「持続可能な観光」を支援していくものにならなければいけないということですね。観光地の方たちにとっては、本当に、修学旅行というのは課題だらけのものを背負わされるみたいになってきてしまうところがありますね。観光地のこともちゃんと考えなければいけないと思います。

4 修学旅行のイメージ、子供たちの姿、望ましい観光客を育てる教育

ここで、少し観点を変わってお話させていただきます。スライドに「懐かしき修学旅行のイメージ」と書いてございます。修学旅行とは私たちにとってどのようなものなのか改めて考えてみたいと思います。少し古い話なんですけれども、昭和38年、これは先ほど岡田さんのお話の中でもありましたが、連合体輸送が始まった年に当たります。昭和38年とは、当たり前ですが、昭和20年という終戦の年に生まれた子

供たちが高校 3 年生になった年なんです。終戦の年の世代が初めて高校 3 年生に到達したのがこの昭和 38 年なのです。

「高校三年生」というと、歌手の舟木一夫さんが浮かんでくると思います。実は舟木一夫さんは、昭和 19 年 12 月にお生まれですので、昭和 38 年の 3 月末に高校を卒業し、卒業した高校の制服のまま、学生服姿でデビューをいたしました。そのデビュー曲「高校三年生」が大ヒットになりまして、その年のレコード大賞新人賞を受賞するわけですが、デビューから 2 カ月後の次の作品が「修学旅行」という楽曲でございます。これも大ヒットいたします。この年だけで 2 ヶ月おきに 3 つの曲を出して、学園 3 部作と言われ大変なブームが起こったわけなんですね。作詞は丘灯至夫さん、作曲は遠藤実さんです。丘灯至夫さんは「高原列車は行く」とか「あこがれの郵便馬車」などの作詞家。発表された昭和 38 年は「ひので号」や「こまどり号」など修学旅行専用列車の全盛期に当たるわけですね。翌年には、東海道新幹線が開通するので、移動の主流は既に電車でしたけれども、サビの部分で「汽車はゆく」という言葉が出てきますが、これは鉄道車両全般を「汽車」と呼んでいると考えればいいと思います。その他、「思い出」や「クラス友達」「地図」「夢見た町」という言葉が出てきますね。2 番の「地図」とか「夢見た町」という言葉は、事前学習を思わせるような言葉ですね。そして「若いぼくらの修学旅行」とありますが、実は「若いぼくらの」部分が大事なところで、子供たちの思春期、成長期に修学旅行を行うことが非常に重要なことであることを指しているのです。大人になってから修学旅行に行こうと言っても、あんまり面白くないと思います。価値が全然違いますね。このようなイメージ、思い出とか思い出作り、友達との交流、学習…こういった言葉は、修学旅行の教育活動としての意義にも重なるものがあるということが言えるかと思います。



次に、令和 4 年 6 月 27 日の朝日新聞夕刊の一面に掲載された修学旅行に関する記事をご紹介します。これは、昨年のシンポジウムに、私が出させていただいた時に発言させていただいたのですが、その際にも紹介いたしましたので、覚えている方もいらっしゃるかと思います。

新聞の見出しは、「修学旅行 礼は箸袋にあり」。埼玉県新座市立第二中学校の生徒さんの話題でした。「出発したばかりの修学旅行生たちが食べた朝食を片付けていて、旅館のスタッフたちは幾つものメッセージが残されているのに気付いた」という文からこの記事は始まります。敷紙や箸袋には「3 日間美味しいご飯をありがとうございました」「一生の思い出です」などの感謝の言葉がたくさん書かれていました。記事の一部を読みます。



「感謝のメッセージは彼らの 1 泊目から残されていた。客室係の責任者 A さん（記事では実名）は「客室でもメモ帳やノートに書いてあった。うれし涙をぼろぼろ流すアルバイトさんもいた」と明かす。支配人の B さん（記事では実名・年齢）は「旅館の全部署の社員へメッセージの現物を回覧。「また頑張ろう」という気持ちを与えてもらった。修学旅行生の受け入れはいいなと改めて思う」。

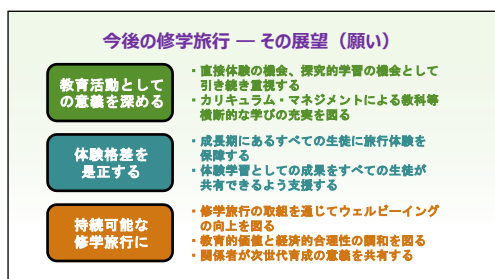
2009 年の調査でございますが、アメリカの旅行会社が行ったヨーロッパやアメリカ、アジアのホテルのマネージャーを対象とした国別の観光客のイメージ調査で、ベストツーリスト（世界最良の旅行客）に

「日本人」が3年連続で選ばれました。知っている方もいると思います。日本人が高い評価を得たのは、現地のマナーやエチケットを守るなどの「行儀の良さ」、礼儀正しい、部屋をきれいに使う、騒がしくない、不平が少ない、ベストドレス（おしゃれ）などでございました。持続可能な観光を支えるのは、訪問地への配慮と敬意を忘れない訪問客です。修学旅行は、そんな観光客を育てる教育の一つでもあると信じております。

5 学習指導要領のねらいとこれからの修学旅行に願うこと

ここで改めて、学習指導要領に示された修学旅行のねらいについて見ていきたいと思ひます。ここに示しましたのは、学習指導要領の解説・特別活動編に述べられた「旅行・集団宿泊的行事のねらい」です。「自然や文化に触れる体験」「教師と生徒、生徒相互の人間的な触れ合い」「楽しい思い出」「基本的な生活習慣や公衆道徳」「より良い人間関係の形成」といった言葉が並んでいます。これらの言葉は、先程ご覧いただいた舟木一夫さんの「修学旅行」や埼玉県の中学校の修学旅行の記事の内容に重なります。学校が多くの方々との協力の中で進めてきた教育活動としての修学旅行は、コロナ禍の危機的な時期を経ても、概ねそのねらいを達成しながら、現在全国で実施されていると言えるかと思ひます。

今後の修学旅行につきまして、私の願うところを述べさせていただきます。と思ひます。



まず、「教育活動としての意義を深める」ということ。学校の中では直接体験として学ぶ機会が少ないと言ってよいでしょう。生徒は教科書や資料、教師の説明などをもとに学んでいきますが、修学旅行は歴史や文化、自然の「現地」に身を置いて学ぶ機会です。主体的に探究する学習の機会になることが期待されます。また、探究する学びの対象が広がるよう、カリキュラム・

マネジメントにより修学旅行の取り組みの中で、生徒たちが色々な教科等に関連する学習が行えるように支援したいものです。

次に、「体験格差を是正する」ということ。私の独断的な見方になるかもしれませんが、修学旅行は全ての生徒が、というより全ての人が共通して持つことのできる旅行体験です。経済的格差や地域間格差などの拡大は、塾や習い事、娯楽などを含め、子供たちの体験格差につながります。修学旅行は、そうした格差を是正する数少ない機会です。その成果までを含め、すべての生徒に共有できるようにしたいものです。

最後は、「持続可能な修学旅行に」するということ。政府の教育振興基本計画では、「総括的な基本方針」に「持続可能な社会の創り手の育成」と「ウェルビーイングの向上」を掲げています。修学旅行の取り組みを通じて、生徒も保護者も教員も、宿の人たち、観光地の人たち、旅行会社の人たち、修学旅行委員会の人たち、修学旅行に関わる人たち、すべてが、ウェルビーイングの向上を実感できることが大切です。また、持続可能な修学旅行では、教育的価値と経済的合理性の調和を図ることも大切です。そして何より大切なのは、関係者の皆さんが修学旅行を通してこれからの社会を支える世代を育てているという思いを共有することだと思ひます。

結びに、VR (Virtual Reality=仮想現実) や AR (Augmented Reality=拡張現実) などの技術が進歩し、私たちの体験する世界はますます仮想化しようとしています。そして、こうした情報技術の進化が、今後の修学旅行に与える影響には予測しがたいものがあります。しかし、修学旅行が、学校内外の多くの関係者の地道な努力により実現し、生徒にとって貴重な直接体験の場となることは、今後も維持されていくものと思います。歴史や文化の名所で、自然豊かな現地で、宿舎の中や移動中に、生徒たちが体験する仲間との一体感、感動や気付き、感性の響き合いなどは、仮想の空間では得られないものです。子供たちの成長の節目に位置付けられる、重要な教育活動である修学旅行が様々な課題を乗り越え、今後とも継続し充実するよう、関係者の皆さんのご協力を、心からお願いいたします。

お聴きいただきありがとうございました。

結びに

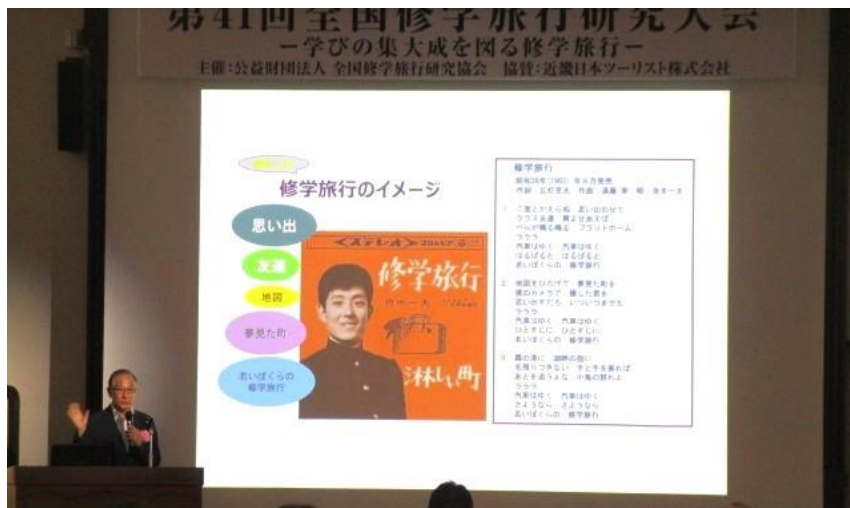
VR (Virtual Reality=仮想現実) やAR (Augmented Reality=拡張現実) などの技術が進歩し、私たちの体験する世界はますます仮想化しようとしています。

そして、こうした情報技術の進化が、今後の修学旅行に与える影響には予測しがたいものがあります。

しかし、修学旅行が、学校内外の多くの関係者の地道な努力により実現し、生徒にとって貴重な直接体験の場となることは、今後も維持されていくものと思います。

歴史や文化の名所で、自然豊かな現地で、宿舎の中や移動中に、生徒たちが体験する仲間との一体感、感動や気付き、感性の響き合いなどは、仮想の空間では得られないものです。

子供たちの成長の節目に位置付けられる、重要な教育活動である修学旅行が様々な課題を乗り越え、今後とも継続し充実するよう、関係者の皆さんのご協力を、心からお願いいたします。





《 第 41 回 全国修学旅行研究大会 》

参加者数：会場参加者 131名 オンライン参加者 71名

情報交換会参加者数：59名

出展情報ブース：13団体

第 41 回全国修学旅行研究大会

資料展示団体 一覧

(50 音順)

1	阿蘇温泉観光旅館協同組合
2	一般財団法人 沖縄観光コンベンションビューロー
3	一般社団法人 岐阜県観光連盟
4	公益社団法人 京都府観光連盟
5	昭 和 館
6	空飛ぶ学び舎ラボ
7	公益社団法人 千葉県観光物産協会
8	一般社団法人 東北観光推進機構
9	一般財団法人 都市農山漁村交流活性化機構
10	一般社団法人 長崎県観光連盟
11	奈良まほろば館
12	公益財団法人 福島県観光物産交流協会
13	公益社団法人 北海道観光機構

第41回 全国修学旅行研究大会

[報 告 書]

2024(令和6)年9月6日

発行 公益財団法人 全国修学旅行研究協会

《本部事務局》〒102-0074 東京都千代田区九段南 2-6-8
九段南ビル 6階

Tel 03-5275-6651 Fax 03-5275-6653

《名古屋事務局》〒450-0003 名古屋市中村区名駅南 2-14-19
住友生命名古屋ビル 6階

Tel・Fax 052-561-7876

《大阪事務局》〒556-0017 大阪市浪速区湊町 1-4-38
近鉄新難波ビル 7階

Tel 06-6636-0885 Fax 06-6636-0890

URL <http://shugakuryoko.com/>